

912.6-Mi91-4ウ



1200500757159

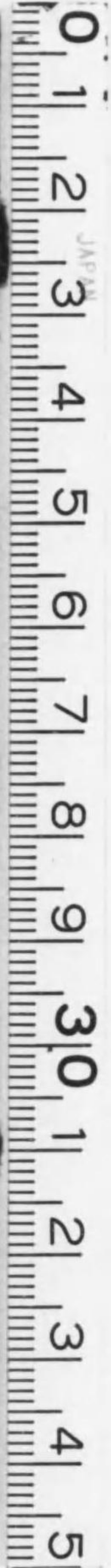
912.6

1291

4

崖

三好十郎戲曲集



始



18



912.6
M291-4

三好十郎戲曲集



櫻井書店

~~1803~~
~~213~~

目次

崖

.....一

稻葉小僧

.....九一

あとがき

.....一六七

著者自装



(一 幕)

現代

人間

おりき

サダ

藤堂正男

仙助

玉川

場所

信州南佐久の山奥。

近くで囀る小鳥。

遠くで山鳩が鳴き交す。

やがて、樹を切る音が谷々にこだましてカーン、カーン、カーンと響く。

その響の間を縫ってノンビリした鼻歌。

こちらに向つて急傾斜をなした雑木山の、棚のやうになつた狭い臺地。
七八本のかなり大きな樹と雑木と切株と下生え。

秋の半ばながら、既にこのあたりを襲ひはじめた朝晩の寒氣のために大半の木の葉は落ち、残つてゐる葉と下生えは紅葉を通り越して黄褐色に枯れちぎんでゐる。

向つて右の奥は一段低くなつて居り、そこから炭焼の薄い煙。臺地の向つて左手の手前は崖ぶちに終り、奥は稜線の方へ廻りこんで、尾根道に續いてゐる。

中央の大きな樹の根元へ向つて、ユツクリとまさかりを振つてゐるおりき。ハンテンにももひきにわらぢで、スツゴリと頬かむりの、男か女か見分けのつかぬ野ら姿。

無心に口づきんでゐた歌が消へて、まさかりの音だけが響く。

サダの聲（遠くで）あーい！……あーい！……さまあーあ！……ばさまよおーい！……

あーい、ばさまよおーい！（近くなる）

おりき ……（やつと聲が耳に入つて、まさかりの手を止めて遠くの尾根の方に眼をやる）……

サダの聲（更に近くなる）ばさまーあ！

おりき ……（間の抜けた野ら聲）おーい！ サダかよーう！

サダの聲 あいよーう！

おりき サダかあ！

サダの聲 あいよう！

（聲がやみ、静かになる。……おりき再びまさかりを振ひはじめる）

（間——）

（尾根道の方から、下生えの熊笹を踏み分け、小枝を踏み折つたりして降りて来るサダ。花模様
の着物に赤い帯の上から紺のモンペをキリリとしまして、手甲脚絆、あねさまかぶりの手拭の上に
古い麦藁帽。背負子に食糧の入つたカマス。色白の頬がボツと紅い。その後ろから藤堂正男。カ
ーキ色のシャツに黒ズボンにゲートルに山靴。レインハットを脱いだ白い額の汗を拭きながら）

サダ （おりきの背後少し離れた所に立停る）……へえ、ばさま。

おりき （樹を切る手を休めないで）よう來た。米あ、まだチツトべ有つたが、おとついであたり

から味喰う切れちまつてなあ。……へえ、今度の窯あ焼き上げたら、チョツクラ内い戻つて見すと、俺あ思つてゐたところだ。ヨントシヨと！……ちやうぶ、待たせるもんだ。

サダ うん。……あの——（そこに立つて、働いてゐるおりきの後姿をシミジミと見守つてゐる藤堂を見る）

おりき （それとは知らず、やつて来たのはサダだけだと思ひ込んでゐるので）ハハ、炭焼も氣樂でえ、が、腹あへつて、おいねえぞ。……ま、下の小屋さ荷いおろして休め。……その崖つぶち、氣い附けて歩べ……一足踏みはづそうもんなら……オング川まで坂落しだあ。……ドッコイシヨと！

サダ ……………

おりき ……内ぢや變り無えか？……あん？

サダ うん……ばさま、あの——

おりき 變り無えかと、駕籠衆が——（と歌の文句でカーンと一つ切りつけて置いて、働く手を止める）……なんとした？（此方を振向く）……う？

サダ ……この方が、さつき見えてな……ばさまに逢ひてえとおつしやるもんぢやから、へえ丁度、一所に連れて來やした。

おりき ふむ……………

（藤堂とおりきが離れて立つて見合つてゐる——）

藤堂 ……おばあさん。

おりき ……お前さまあ、夏時分麥畑でお目にかゝつた——

藤堂 藤堂正男です。……こうして、又……お目にかゝります。

おりき （永い間）うん……そんで——ふむ。……さうかい。

藤堂 ……おわびをしに來ました。

おりき なあによ。……うむ。俺あ——（言葉が續かぬ）……（つとめて明るく）そんな、お前さま……頭あ上げなせえ。そつたら、お前さま……さうかや。（言ひながら、スツポリかぶつてゐた手拭をとり、キチンと頭を下げて）御苦勞さまでがした。

藤堂 は……………

おりき さぞ、なあ——

藤堂 ……こうなつて、實あ……おばあさんの事ばかり思ひ出してゐました。
おりき うん……うん……。

(間——山鳩の聲)

おりき ……こんだも富士見の方から山越へして來やしたかね？

藤堂 いえ、富士見へは行きません、ぢかに此方へ——。驛で聞いたら、丁度、板橋の人が來合せてゐまして——。

サダ 地藏堂の四郎ちゃんが、ともなつて來てくれた。

おりき さうかや。……せん時は、お前さまに出しぬけに聲かけられて、へえ赤嶽の天狗さんかと思つて、たまげたつてよ、ハハ。

藤堂 ……(微笑しつゝ山の方を見て) スツカリ雪ですな、八ヶ嶽も。

おりき (これもそちらを眺めながら) うむ……んだけど、まだ、こいで、今年は少ねえ方だ。……山あ見ると、おふくろさんの事、戀しからず？

藤堂 (言ひ當てられ) いやあ……炭焼きですか？

おりき うむ。……サダ、小屋へ行つて、湯でもわかせ。

サダ あい。

藤堂 かまわないで下さい。……なんと言ふ事なく、ただ僕あ、おばあさんを見たくなつてやつて來たんです。……どこへ行つて何を見ても、まるで僕には、なんの事やらサツバリわかりません。どう考へたらいいか——まるつきり、わからないのです。(落葉の上にしやがみこむ)

おりき ……方々、ひでえと言ふなあ。

藤堂 ……先々月、戻されて來て以來、一所懸命、何か考へやうとしても、駄目です。たゞ人も物も、何もかも、ぶちこわれてしまつたと言ふ事だけは事實です。……なぜです？ 僕には臍に落ちないのです。

おりき ……そりや、まあ、なんだ、いくさに負けたからでやせう。

藤堂 なぜ負けたんです？ どうして、どんな譯で負けたんです？

おりき うん、そりや……(困つて口をモグモグさせてゐる) そりや、へえ、此方よか先方が強かつたからだ。それで、負けた。

藤堂 え？(殆んどギツクリする位にびつくりして、マチマチとおりきを見る)……。

おりき 角力が、土俵にあがつて力一杯、こん限りやつて見て、投げつ飛ばされた。だらす？
したら、なにも悔む事あ無えづら。

藤堂 僕あ、しかし、兵隊でした。軍人でした。いくらさうは思つても、國民の前に平氣で
立つてゐるわけには行かないんです。

おりき 違う。いくさあ、軍人さんや兵隊さんだけがしたんぢや無え。俺達みんな一緒にした
んでやす。負けたのも俺達一人々々、みんなが負けた。

藤堂 ……。世間では今、急に、手の平を返したやうに、いろんな事を言つてゐます。……
しかし、僕等が戦争の中に居て考へてゐた事は、たつた一つでした。お國のために、
國民のために——たゞそれだけのために自分一身が役に立つならば、笑つて死なう。
——それだけです。正直、それだけでした。えらい軍人に出世をしやうの、名譽をい
たゞかうのと言ふ氣は微塵もありませんでした。また、そんな氣になれる筈も無い有
様でしたからね。人生二十五年——僕等の仲間は、いつも笑つて、言つてゐました。
國のためになるなら——それです。それが、今こうなつて、いろんな風に言はれて
も、間違つてゐたとは、どうしても、僕には、どうしても思へないんです。

おりき 間違つてはゐねえとも。お立派だ。へえ、お立派だとも！（泣いてゐる）

藤堂 ……勿論、この戦争がどうして起つたか、誰が起したか、正しかつたか間違つてゐ
たか——その邊のハッキリした所は、僕等にはわかりません。戦争をしかけたのは此
方で、しかもそれを引きすつて行つた上の方の連中が間違つてゐて、われわれを良い
やうにごまかしてゐたんだと言ふ事は、近頃少しづつわかつて來ました。………しか
し、だからと言つて、今急に、その連中だけをとがめ立てゝ見たところで、なんに
なります？ そんな連中を生み出し、國民の先頭に立たせたのは、われわれです。第
一、國が間違つた戦争を起さざるを得ないやうに一步步と進んで來たのは、われわ
れが好まうと好むまいと、永い間のわが國の運命だつたのです。つまり、此の戦争が
間違つてゐたとすれば、明治以來のわが國の歩み全體が間違つてゐたんです。………
その、シツポの所——つまり今度の戦争の所だけを取り上げて良いの悪いのと言つて
見ても、どうにもなるものでは無いと思ふんです。つまり、此處十年位でわが國は負
けたんぢやなくて、これまでの百年間が負けちまつたんです。………百年間、われわ
れは間違ひつゞけて來てるんです。わかりますか、おばあさん？ わかつて貰へます

か？

おりき …………… (ガクリガクリとうづく)

藤堂 泣いても、僕あ、泣きまれません。……自分一人が死んで済む事なら、僕にや、なんでもありません。しかし、僕一人が死んだつて、この敗北はどうにもなるものぢやありません。……國民全體が食物が無い、家が無い……すべてがぶちこわれた。……あたりまへです。今眼の前のこんな事位、實は大した事ぢや無いのです。本當は、この百年間の日本が根こそぎ、ぶつこわれてしまつたのです。百年間の間違ひの尻ぬぐひを僕等がさゝれたのです。……それに僕あ氣が附きました。こんな風に日本をしてしまつたのは、實はアメリカヤソビエツトやイギリスぢや無かつたんです。遅かれ早かれ、何かの形でこんな風にならなければならぬやうに、日本は歩いて來てしまつたんです。つまり、自分で自分を叩きこわしてしまつたんです。……つかまる所も、たよる物も、洗ひざらひ無くなりました僕等には。

おりき ……うむ。……(せつなそうに、ウロウロとした眼でまさかりを見たり相手を見たり、落葉の上を見たり。立つてゐる姿までが、たより無い)

藤堂

……今、あつちでも此方でも、いろんな連中がいろんな事を説き立てゝおます。しかし、僕には、どれもこれも信用出来ません。理屈としてどんなに立派なものでも、僕にや信用出来ないんです。此方が駄目になつてゐるんです。……永い間あれだけ信じ切つて來た——そのためにはいつでも笑つて死なうと思つてゐたものが、全部間違ひで嘘だつた。そいつがわかつて見ると、もうこれから、どんなものが飛出して來ても信用する氣にやなりません。此方が駄目になつて、何でもかでも疑ふやうになつてしまひました。……どこへ行つて、誰に會つても、どんな事を聞いても嘘のやうな氣がするんです。そいで……そいで僕あ、おばあさんに會ひに來ました。あなただけは、嘘はつかない。……おばあさん、お願ひですから、僕に教へて下さい。

おりき ……(齒の無い唇を、せつなそうに顔はせて力無くつぶやくやうに)……教へると？ おらが、え？

藤堂 どんな山奥へでも、僕あ、おばあさんに會ひに行きます。

おりき ……(立つてゐる身體がフラフラしたと思ふと、こらえてゐた涙がタラタラと頬に流れる) そつたら、お前さま——へえ、おらにや、わからねえ。(口のはたに流れて來た涙を指で

拭く)

藤堂 何を、よりどころに、どこを手がかりに——どんなものを土臺にです——その、そんな土臺が全體、ちつとでも残つてゐるか？ そいつを——おばあさん。

おりき 無理でやす。……(指では間に合はなくなつて手拭でゴリゴリ鼻のまわりを拭く)へえ、こんな山ん中の、モーロク婆だ俺なんど。何が、わかりすものか。こらえて下せえ。……へえ、もう、こらえて下せえ。(力の盡き果てた子供が、自分をいぢめる年上の子にあやまるやうな、投げ出し切つた詭言)

(間——しみ入るやうな山鳩の聲)

藤堂

……(フツと我れに返り、おりきにばかり注いでゐた眼で、あたりを見廻す。すると、先程から背後の樹に寄りかゝりつゝ、話に引入れられて、山の娘らしく澄んだ美しい眼をカツと見開いて喰入るやうに自分を見詰めてゐるサダの視線にぶつつかる。瞬間、二人がチツと見合ふが、やがて藤堂がおりきに視線を移す。おりきは、まだボンヤリ立つてゐる。更にサダを見る。そして、自分が場所柄も考へないで自分だけの氣持に身をまかせて行き過ぎてしまつた事に氣が付き、急に弱々しい眼の色になり、額に手をやつて油汗をこすり拭いたりしつゝ……やあ、どうも、

すみません。……どうも……ハハ。(まばたきもしないで、まだ自分を見詰めてゐるサダに向つて寂しく頬笑みかける)……なに、ホントは、たゞ、何と言ふ事無くおばあさんを見たくなつて、やつて来ただけなんです。それだけなんです。それが、つい、どうも……かんべんして下さい。

おりき うん、なにさ……。

サダ (怒つたやうな句調)だども、俺にや、この人の言はつせる事、ようく、わかりやす。

藤堂 え？……。

サダ 俺にや、ようく、わからあ。フン！(ポロリと大粒の涙。眼がキラキラ光つてゐたのは涙を一杯溜めてゐたのである。それをしかし拭きもしない)

おりき なんだ？

サダ だつて、さうぢや無えかい。さうだらす？

藤堂 いゝんですよ、もう、いゝんです。どうも……ハハ。(相手の氣持がこたえて來るのを、寂しく笑つてかわす)……おばあさん、僕に百姓はやれないでせうか？

おりき 百姓にかえ、お前さまが？

藤堂 駄目でせうか？

おりき ふむ。……（泣きくたびれた子供が、自ら機嫌を直して顔笑むやうに、弱々しい花が開くのに似てニッコリする）駄目といふ事あ、無え。へえ、やらうと思ひ立ちさえすりや、たつた今からでもやれやす。

藤堂 僕などに出來るかどうか、怪しいもんですけど——

おりき 手が有つて足が有つて、それで地面が有りや、お前さま——怪しいもへチマもお前さま、なあサダ。これなんづも、こんな娘つ子でゐて、チャンとこれで百姓仕事は一人前だ。なあ、サダ？ それとも半人前かや？

サダ ウフン。……（機嫌を直して、小枝を拾ひにかゝつてゐる）

藤堂 おばあさん、僕にも教へてくれますか？

おりき （一緒に居た子供づれが、何かの事でみんな泣いてゐたのを、自分も泣いてゐた年上の子が先づヒョイと泣きやんで、急に思ひ切つてひよ上げた事を言つてほかの子達の機嫌を直してやつてゐるやうな調子）ハハ、教へるの習うのと、そんなしちむつかしい事であらうか。ベトとドン百姓共倒れと言ひやしてね、つまりが、土さえ有りや……そんなまあ、この土と

……なんだ、この……へえ、つゞまる所がよ……末永くへえ、仲良く遊ぶ氣になりや誰にでも出來やす。

藤堂 遊ぶんですか？

おりき 遊ぶ。撫でたり、さすつたり、つねつたり、引つ掻いたりしてな。（言ひ方がおかしいので藤堂もサダも笑ひ出す）地めんと言ふもんは、さうたもんさ。さうだらう？ 彼方を向いても此處を向いても、立つてもしやがんでも、地めんのうだ。地めんから足い踏みはづして、おつこちた話あ聞かねえ。へえ、安心なもんだ。さうづら？ ハハハまづ、ゆつくりしなせ。……サダ、内ぢや變つた事無えか？

サダ うん。ぢいは、チット具合が良いと言つて起き出して、ひぢろんところで慎太相手にわらぢ作つてる。四五日あと、甲州の叔母さんが小豆を三升ばかり持つて見えた。みんな元氣だと。

おりき さうかや。……慎一あどうした？

サダ 工業學校にあげることにしたと。しばらく、あばれてばかり居て、そりや、きかなかつたそうなが、近頃ぢや、おとなしくなつてね、秋にや作業所にもついて行くし、よ

く働いてると。

おりき ふん。

藤堂 せんの時、僕も逢つたお孫さんですね？

おりき うん。……あの後、小僧め、ちようぶ怒つてな、おいなかつたよ。ハハ、無理あ無え、スツカリその氣でわやがつたからな。しかしまあ、小僧も、まんざらの馬鹿でも無え。よからず、それで。

サダ そいから、玉川のお旦那、今日此處いやつて來たづら？

おりき ……玉川のお旦那と？ 又來たか？ 耕地の拂ひ下げの話づら？

サダ うん。そいから供出の事も言つてたやうだつた。ちい、困つてた。ばさまに相談してからと言つたら、此處の事聞いてな、なんでも念いでるようだつた。

おりき さうかや……うんにや、此處にや來ねえぞ。だども、供出は農會からさう言つて來て寄合ひできまる事ぢやし、拂ひ下げの事あ、つまりが地代の事と地割の事ぢやから、世話役衆の量見一つだらす。

サダ 俺、よく聞いて無かつたから——。

おりき なんにしても、ケブな話よ。玉川さまなんつお大衆衆が一人々々俺達のとこ廻つて歩いて相談しずともさ。

藤堂 耕地の拂ひ下げと言ふと——？

おりき うん、板橋のはづれからな、さうだ、お前さま、せんに見た麥畑よ、あの奥から牧場のこつち迄、おととし軍で買上げて、なんたら言ふ軍用地になる筈だつたが、こんな事になつて要らなくなつたので、そんなの、以前板橋で共同耕作やつてゐて、その後荒れ放題になつた所だけを……左様さ、あんでも十町歩位はあるべし……こんだ、あちこちの農家で本式に拂ひ下げて貰ふといふ事になつてな、それについて、今言つた玉川さまなどが、世話あ焼いて下すつてゐやす。

藤堂 さうですか。それで自宅でも——？

おりき うむ、畑あ少し足りねえからな。

サダ んだけど、ばさま、お金あ、有るかい？

おりき 金かや？ 金あ無え。

サダ ちいもそれを心配してゐた。お金が無くて、なんとして——

おりき なんとかなるべし。

サダ ンだけどさ……

おりき 心配するな。どうで作地だ。百姓が作らねえで誰が作るものだ。

サダ 金を、だども、ほかの家で出して買つてしまへば、作りたくも作れねえのに。

おりき へえ、だから俺あソツと行つて、あの地所の隅つこの二段畑に、こねえだ、麦い蒔いといた。

サダ ンだからさ。んだから、下手あすりや、種とこやしだけ無駄にならあ。

おりき どうして無駄になる？ 春になりや麦が出来らあ。

サダ だからさ、阿呆だな、麦もさうなりや人のもんづら——？

おりき 人のもんになつても、吾がもんになつても、とんかく、麦あ麦だあ。麦あ食へるぞ、

誰かの口を肥さあ。どこの内の地面になるかわからんつうので、放つて置いて麦蒔のシユンが過ぎちまやあ、何も出来ん。ふん、なんの無駄であるかい。

サダ 無駄では無えかも知れんが、そりや、なんだ——無茶だ。

おりき ムチャクチャの阿呆か。

藤堂 ハハハ。

おりき ハハハ。(サダも笑ひ出してゐる)……さてと、そのムチャクチャと言ふところで、もう一

息やろかな。(きげん良く、ベツベツと兩掌につばきをくんで、まさかりを握る)……ちよう

ぶ、又、しぶてえ樹だぞ、此の樹あ！(ふりかぶつて、拍子になつて)ヤーレ、山で、

と！

(ガツ！ と樹を切る音)

(二度目の音に續いて、傾斜の上の方からザザザと下生えの枯れた熊笹を踏みしだいて仙助が降りて来る。降りて来ると言ふよりも、轉がり落ちて来ると言ふに近い。落葉の中に膝を突いてフア！ と氣の抜けた聲を出す。しるしばんてんに乗馬ズボンにゴム靴に、耳蔽ひ附の烏打帽、

左手に大型のハンゴウをさげてゐる)

サダ あれま！

おりき ほい、あぶねえ！

仙助 ふあ！ ふう！ ……へえ……フフフ、こん、今日あ！

おりき おやおや、お前、海の口の蛸仙ちやねえかや？

仙助 ふう！ へつへ、えいあんべえだのし。

おりき 出し抜けに、まさかりの先へ飛び出して来るもんだ。へえ、もう少しで刃に當てるとこだ。

仙助 ふあ！（切株につかまつて立つが、フラフラしてゐる）この上まで來たら、いきなりガッツン！ 地びたあ叩き割られたと思つたい！ ふう！ 蛸が、山へ登つて、眼え廻してりや、世話あ無え。（息切れしながら、へらぞ口を叩く）

サダ フ、フフフ。（藤堂もチョット笑ふ）

おりき ちやうぶ、青いツラして、どうした？

仙助 ばさま、なんか食ふ物有つたら、けれ。なんでもえいです。

おりき 食ふ物と？

仙助 青くもなるべし。臍が背骨にくつついてら。ふう！ 頼みやす。

おりき ハハ、さうかや。さうだな……おまんまが、まだ少し残つてゐた筈だ。サダ、持つて來てやれ。

サダ あい。（右手へ歩み去る）

おりき （その背へ向いて）焚口んとここに置いてあらあ。小屋からお香こも取つて來う。（右手の下の方から「あい」と答へるサダの聲）……だども、海の口の町からこんな山ん中へ來るのに辨當も持たずかや？

仙助 なにさ、米あ持つて來たけど、とうに食つちやつた。味噌もこれに入れて——（と手のハンゴウを振廻した拍子にカランと取落す）おつと！ おつとつと！（同時にハンゴウが崖ふちの切株に當つて跳ねて、ふたと身が別々になり、崖下のガレの急傾斜を落ちて行く）しまつた！（カランカランと、ハンゴウの轉落して行く音はしばらく続き、次第に微かになり、消へる）畜生！

おりき ハハ、蛸の泣面、蜂がさゝあ。フフ、なあに、後で向うの尾根廻つて拾つて行きやい。オング川あ落ちずに居れば、チャンと有らあ。……するとなにか、お前どこから來た？

仙助 う？（惜しそうに、まだ崖の下をすかして見ながら）この奥から來たよ。

おりき この奥あ山林區だ。山林區の先あ、山又山で——

仙助 山林區の番小屋に居たんだ。

おりき ……なによしてゐた？

仙助 — 木の子う捨つたりよ……。

おりき 木の子のシユンは、とうに過ぎちやつてるづら。

仙助 んだからよ、チットしか拾へんかつたで、へえ、食つちやつた。

おりき ヌラリクラリと、相變らずだ。

仙助 へつへ！ 時にばさま、牧場跡の、軍の拂ひ下げ地所の事あ、どうなりやした？

おりき 農會あたりで、いろいろと、たくらんでる奴が居るやうだぞ、氣を附けんと。

（話に乗らず）……又、何かやつたな、お前？

仙助 あんだえ？ へつへ。

サダ （下生えを踏み、釜を下げて、右手下方から戻つて来る）……あい。お香こはチットしきや無えぞ。

仙助 おつとつと、ありがてえ！ なに、お香こなんぞ、いらん。（ひつたくるやうに釜を受取つてシヤモチで釜の中を撚廻し、むしやぶり附いて、シヤモチから食ひはじめ）……む！

おりき おまんま、そんなに、はね飛ばしたりするだら、食はせんぞ！

仙助 へ？ ……（おりきの顔を仰いで見てゐたが、急にすなをに釜を下に置き、草の上に四角に坐

り直して、兩膝に兩手を置いてキチンとおじぎをする）……いたゞきや。

おりき フフ……あい。たんと食ひな。

仙助 ……らむ……（シヤモチの音）へつへへ、おつかねえからな、此のばさまあ——（あとはモグモグと食ふのに忙しい）

サダ ばさま、今の窯あ、もうちき、窯出したな？

おりき ろむ、もうチヨツトだ。

藤堂 （右手下方を見やりながら）あれですか？

おりき 紫色の薄い煙が出てゐるづら。

藤堂 一度にどれ位焼けるんです？

おりき 十俵ばかりだ。……どれ、後の木を、もうちつと切つとくかな。

藤堂 僕に少しやらして下さい。

仙助 ……（飯を喰みながらの不明瞭な聲で）……誰か、來た。……誰だ、ありやー？

サダ なんだえ？（藤堂がまさかりを取つて木の方へ）

仙助 ほら、あすこの尾根とこだ。ほら！

おりき なんにも見えやしねえ。

仙助 ばさまの眼ぢや——

おりき あにを、だども、お前、釜あ抱えてウロウロする？ 坐つて落着いて食ふたら、ど
だ？（藤堂木を切る）

仙助 うん……。 （又、釜の中を掻き廻す）

藤堂 （サダに）だが、實に良く切れますね？

サダ ……（クスクス笑つて）豚の首なぞ、一打ちで斬れやす。

藤堂 豚？ 豚も切るんですか、これで？

サダ うん、ズットせん、内に泊つた木こりさんが、豚あつぶすのに使つた。

おりき ハハ、並みのまさかりよか、双渡りが長く拵えてあるからな。もう死んだが、岩村田
の、野鍛冶だが名人で、信行のぶゆきつう人の打つたもんだ。

サダ ばさま、自慢だ。

おりき お、よ。こつちの奴も切れるにや切れるが、段違ひ——（言ひながら、他のまさかりで

他の樹を切り試みる。さうして藤堂とおりきが交る交る——しかし話しながらなので、あまり力
を入れないで樹を切る）

仙助 あ、やつと、人間らしくなつたい。まつたく俺あ、どうなるかと思つたぞ。一日か二

日なら、なに、平氣だが、なんしろお前、今日で四日だ、フン！

おりき おかみさん、元氣か？

仙助 うん？ ……うん、ありや此の春、叩き出した。

おりき 出したあ？ なんでまた？

仙助 う、うん（まだモグモグやりながら）家風に合はねえ。

おりき ……ハハ、ハハハ、家風か？ 蛸仙んところにも家風なんつもんが有るか？

仙助 そりや、有る。

おりき さうか。だども、とんだ、お前なんぞにや過ぎもんのおかみさんだつたちやねえか
や。

仙助 んだから、家風に合はねえ。へつ、くそ小生意氣なアマだあ！

おりき ぢや子供はえ？ たしか二人だつたな？

仙助 餓鬼共あ、内でなんとかやつてるづら。

おりき……お前もえゝかげんにしたら、どだ？ ヨタあぶつて暮すのも潮時が有らあ。いつまでもそんな身性ぢや、行末ろくな事は無えぞ。

仙助 ふん、そいぢや、まつとうにやりあ、ろくな事が有るか、ばさまの前だが？ フ、本職の運送をコツコツやつても、手取りが一日五圓位ぢやぜ。五圓ぢや、いまだき、親子三人忽ち乾物だらす。時勢が悪いや、時勢が——ウツ！（まだ言ひ續けやうとしてゐたのが、何かを認めてギツクリしたとたんに食物を咽喉に詰める）

おりき ……なんとした？

仙助 ウウ！（立上つてゐる）

サグ ……ばさま、玉川さまのお旦那が——（尾根道の方から、此の崖に降りて来る玉川。狩獵服が、た上等の背廣に長靴に毛皮の縁無帽をかむつて、ステツキにカバン）

おりき うん？ ……へえ、こりや……

玉川 ……えゝあんべえだなあ、お天氣が続いて。やあ仙助、こんな所に來てゐるか？

仙助 へい……へつへへ。

玉川 ばさま、いつも丈夫で結構だな。

おりき いえもう、いけやせんよ。（辭儀）これは、ようござらつしやい。

玉川 やあ……いやチロツト相談したい事が有つてね、内の方へ寄つたが、此方だと言ふんで。

おりき わざわざ、こんな所まで——

玉川 思ひ立つと、例の通りのせつかちだ、ハハ。第一、此處いらの田地の事に就いちや、とにかく、ばさまの耳に先づ入れないぢや、しやうが無いと思つてね。なにさ、いよいよ例の耕地拂ひ下げが實施される段取りになつた。それでまあ問題は希望者への分割の件だ。

おりき そりやま、わざわざどうも——。へえ、俺んとこなんざ、どうで、ようございキしたのに。……とんかく、まあ、旦那さんがたのお骨折で——かたじけ無えこつてやした。

玉川 なに、禮にや及ばねえ。村の事で彼方此方駆け廻つてりや、これ位のことホンのついでに出来る仕事でね、先づ私なぞの、これがまあツトメさ、ハハハ。そこでなあ、残

るところは地價の事と分割の事ぢやが、地價の事は先方の意向もあるし縣の考えもあるしね、その邊と私等の方でよく話し合つて決めるとして——いや、どつちせ、もともと買収される前は村の入會いっかいで共同耕作をしてゐたんだから、拂ひ下げるとなつても、地價はタカが知れたもんづら——大した問題ぢや無い。たゞこの地割の件は、誰にしてもなるべく地味の良い、水を引くの便利な良い所が欲しいわけでのし、いよゝいよとなる希望者の方で問題が起きやせんかと思ふ。ゴタゴタしそうなんだ。それでまあ、われわれ最初から世話を焼いてゐる者達が、世話焼きついでに、地價の交渉をやると同時に地割りの點までスツカリ案を作り上げて、希望者の各農家では最後にハンコを一つ押せばいいと言ふ所まで段取つてやるのがよくはないかと、まあ考へたわけだ。

30

おりき ……はい、そりやまあ——。

玉川 就いては、そんな事の一切に關してだな、私をはじめ、海の口の須山さん、馬流まながしの新田さん、その他農會の方にスツカリ一任してほしい。でない、今後の話し合ひの上で、皆さんには大して係りの無い小さな事まで希望者の家を一軒々々廻つて歩かなく

ちやならんのでね。それぢや、日を喰つてたいへんぢやし、第一、こんな山間部に入り込んでさ——今日にしても、鐵橋下の丸太橋は落ちてしまつてゐてなあ、崖道を廻つて來たが、すべつたりころんだり、いやどうも冷汗をかきやした、ハハハ。

おりき へえ、秋が隣で山あ少し荒れやしてのし、オンゴ川あ、水が増してゐるから——ハハ、さうでやしたかい。

玉川 氣だけはまだしつかりしてゐるつもりでも、もういかんて。年だなあ。……（コソコソ山上の方へ行きかけた仙助に）仙助、どこへ行くんだ？

仙助 へ？ ……へい、あのう、チョックラ山へ——へ、へへ。

玉川 まあ、そんな、逃げなくてもいいだらう。お前にや、ちよつと頼みたい事もあるんだ。

仙助 へえ……。

玉川 ハハ……（下げてゐたカバンから書類を出しながら、おりきに）そいでなあ、ばさま、一々廻つて歩いてゐたのでは、とてもおいねえから、そこで、まあ、私等に一任してほしいと思つてね——これだ。

31

おりき (受取り、それを眼から引離すやうにして見る)……へえ……だども、俺などにや、よくわからんし……どうでもいゝから……内のぢさまにでも、さう言ふて下すつて——

玉川 そりや私からよく話して来た。……俺あ病人で、内の事あ、ばさまに任せてある。ハシコもばさま持つてゐるから——ぢさま、さう言ふもんだからね。

おりき ハシコでやすかい。持つてゐやす。(言ひながら、すなをに、頸から紙でつるして帯の中に入れてある財布を引きずり出しにかゝる)

玉川 しかし、とにかく、よく讀んだ上で。

おりき どうせ、俺にや讀めねえ。(財布をほどくために、右手に持つてゐた書類を、先程からそばに立ってゐる藤堂に渡す) チョックラ、お前さま——

藤堂 は……(黙讀)

玉川 え、と、この方は——?

おりき ……はい、こりや内の、なんだ——親戚のもんだ。

玉川 いゝあんばいですね。

藤堂 いやー(おりきを見てゐたが)……今日は。……(書類に目を通してゐる)……委任状で

すか。

玉川 やあ、どうせ形式だけで、そんなものが有つても、どうと言ふ事も無いけどね、相手が相手なもんだから、手つゞきだけはうるさい事を言ふ。こいだけ叩きつけられて、役人など實際の権力は根こそぎ取上げられてしまひながらも、永い間の癖はなかなか抜けませんよ。繁文縟禮といふやつ。ハハハ。

藤堂 ……しかし、此處に書いてある事は、結局、拂下げの地價や地割り一切を一任する……言つて見れば白紙委任状と同じやうな——(言ひかけるが、自分が深くも知らぬことに就て立入り過ぎるやうな反省が起き、言ひ蹴んでしまふ)

玉川 さう。……それでいけないとすると、私共としても一々その煩に耐えないので、こゝらで委員の役を辭退したい。もともと私共は此邊の農家の爲に少しでもなればよいと思つて乗出したゞけでしてな、全部がうまく行つても、まあハッキリ言ふと、私などに三文の得も行くわけでは無いんぢやから。

藤堂 いえ、僕には詳しい事はわからないのです——。(書類をおりきに返す)

玉川 全體この邊は、農業と言つてもこんな山間地でね、殆んどが零細農家。耕地が絶對的

にたりないんでしてね。そこへまあ、荒地であつても、とにかく、殆んど無償に近い地代で田地が手に入る話なんぢやから、結構だと思つて、まあ――。

仙 助 しかし、なんだそうでやすね、こんだ岩村田に出来ると言ふ農民組合でも、拂下げ問題に就いちゃ動き出してるそうでやすね？

玉 川 農民組合がね？……だが動き出すと言つても、話が此處まで來てゐるのに、今更、どうするんだ？

仙 助 縣廳にも押しかけた、農業會にも行つたそうぢやねえですかい？

玉 川 さうかねえ、それで？

仙 助 それで――いやあ、お旦那がそれ知らねえわけあ無え、農會の役員だもん、だから？

玉 川 ふん……だが、しかし、お前はよくそんな事知つてるなあ。どこで聞いた？

仙 助 どこでつて、俺あ、へえ、なんとなく――

玉 川 お前なんか、騒ぎまわつてる口ぢや無えのか、そこいらで？

仙 助 じよ、冗談おつしやります！俺なんぞが、俺あ、へえ――

玉 川 わからんぞ。近頃の御時世と來たら、何が何に化けるか、けんとうも何も附かんからな。

おりき ……(しばらく前から、少し離れたところで、コッコツと鈍で木の小枝をこなしてゐたサダに呼びかける)サダよ、お旦那に、茶あわかして差し上げる。

サダ あい。

おりき そうだな、此處で火燃すべ。やかんと茶碗と三又持つて來い。

サダ あい。(落葉を踏んで右手へ降りて行く)

玉 川 いや、かまわんでくれ。今日はチョツト急ぐ。それに、なんだ、マゴマゴしてゐると、歸りが暗くなつてしまふ。こんな山奥で路にでも迷つたら、おしまひだ。

仙 助 全くでさ。へへ、何が出るかわかんねえ。

玉 川 山犬や猪なんどのけだものなら、まだいゝがな、怖えのは人間さ。さうで無くても蜻仙なんて言ふ化物がウロウロしてゐるんだからな、ハハ。

おりき アツハハ。

(笑ひながら、その邊の小枝をピシリピシリと折り集めてゐる)

仙助 化物はひでえや。

玉川 ひどくとも、さうだらす？ 運送の人夫やつてるかと思ふと、いつの間にかゼゲンで稼いでゐる、變な山あ當てこんで山師はやる、田地の千三つ屋でござれ、選挙の運動屋でござれ……

仙助 へへ、そりやね、さうしなきや、俺だちみてえな者あ、食つて行けやせんからね、吸ひ付きやすよ。へへへ、しかし、これで世間にや、小蝸も居りや大蝸も居るやうな譯合で、又、狸も居りや古狸も居まさ、お旦那の前だが、へへ、さうでやせう？（おろきがマツチをすつて焚火をはじめてゐる）

玉川 ハハ、遠慮するな、私のことを古狸とみんなが言つてる事あ、知つてるよ。それ位、知らなくて、縣會や農會で仕事はやれんさ。ハハハ、すると化物同志と言ふ譯か。しかしなんだぜ、お前も、あんまり變な事あ、しない方がいゝぜ。こんな山奥なぞにココソもぐづり込んで逃げかくれするなんて、化物にしちや往生きわが悪る過ぎやせんかい？

仙助 だつて俺あ、へえ、たゞ、山歩きが好きなもんで、こうして――

玉川 四五日前から、下の駐在が、しきりにお前を捜してゐたぞ。

仙助 へえ……。

玉川 米の闇取引を、お前、やつたそうぢやないか？

仙助 へ？ 米の闇――？

玉川 よつほど大きくやつたのか？

仙助 ……へえ？ 駐在がさう言つてやしたかね？

玉川 白つばくれちや、いかん。

仙助 白つばくれやあ、しません。けど、變だなあ――

玉川 何が變だ？ 駄目だよ、いくら山ん中へ逃げ込んで見たつて、いつまでもかくれて居られるもんぢや無からう。どうせお前の事だ、米の闇と言つても、たかだか一俵か二俵づら？ 大した事にやららんから、サッサと歸つて名乗つて出るんだな。

仙助 駐在は、ほかに何にも言つておやせんでしたかね？

玉川 ほかに？ ……すると、ほかに何かやらかしたのか？

仙助 へえ、いや、そんな事あ無えです。へへ、とんでも無え！

玉川 ……いゝかげんにしたがいゝぞ、お前も。なあ、ばさま。

おりき さうでやす、今にロクな事あ無え。子供等が泣かあ。

サダ (落葉を踏んで右手から戻つて来る) あい。……(焚火の上に三又を擡げ、やかんをかける) もう、窯出ししてもよからず、ばさま。煙が、ちようぶ、薄くなつて来たぞ。

おりき おいよ、茶でも飲んだら、やるかな。……(藤堂に) お前さまも、此處へ来て一服さつし。

藤堂 はあ……(焚火の方へ寄つて来る) 聞いちや居たが、なるほど、チョット陽がかけると、冷えますねえ。

おりき 佐久の三月鼻曲りと言はあ。まだまだ、これが二月三月となると、働いてゐても鼻の先からキューンとしてみて来やすよ。

仙助 ……玉川のお旦那、しかし、なんでやすねえ、だんだん、この、面白え世の中になつて来やしたねえ、へへ、さうぢやねえでやせんかい？

玉川 なにが面白いんだ？ そりや、お前みてえな、コソコソと世間の裏を歩きまわつて、ちつとでも儲けになりそうな事件と見りや鼻あ突込んで、へばり附こうと言ふ連中に

や面白くなつて来たかしのれんが、わしらのやうに、なまじ、ちつとばかり財産が有つたり、公けの仕事なんぞにかゝりあつてゐる人間は、から駄目だ。近頃の、この、地下のもの鼻息なんてもなあ、荒くなつたのなんのつて！

仙助 へつへ！ さうでやすかねえ、俺あまた、お旦那あたりは、こんな事になつて来ると、色々とうまい話が出来て来て、面白づくめで、えられねえ筈だと思つておやしたかねえ？ 現に供出米の事ぢや供出委員会の方で、だいぶうまい話になつてゐると言ふ噂さなんとも有りやすかねえ？

玉川 うまい話？ うまい話とはなんだ？ おい蛸仙、お前さつきから變に奥齒に物のはさまつたやうな事ばかり言ふが、何か言ひたい事が有つたら、もつとハッキリ言つたらどうだ？ 聞こうぢやないか！ ほかの事ぢや無えぞ、米の供出に就て、供出委員会でしてゐる事を妙な風に見られちや、わしら、これで責任上黙つちや居れんぞ。

仙助 そ、そうぢや無えですよ、そ、そんな、お旦那、難くせを附けるのなんのと、そんなわけぢや無えですよ。俺あ、なにも——言葉が過ぎたら、ごかんべん願ひやす。俺あ、へへ……たゞ人がなんだかんだと言つてるもんで、チョットその——

玉川 人の事ばかり気にして無えて、ちつとはウヌがみじんまくでも考へたらどうだ、お前も？ 今度もだ、どれ位の闇米扱つたか知らんが、わしが町へ歸つて、これこれで蝸仙に逢つたと言やあ、どうなるんだ、え？

仙助 そ、そんな、お旦那、そんな、ねえ、腹あ立てねえで下せえよ。俺あ、なにも悪氣が有つて言つたんぢや無えですから。へえ、つい、口が軽いもんで、ペラペラつと、つい飛出しちまつて。へへへ、どうか、お旦那、おわび申しやす。

玉川 わかりや、いゝさ。いゝけど、輕口たくくのも事に依りけりだぞ。供出の事なんぞお前、今方々でゴタゴタして問題になつてゐる最中なんだから、それに就てへたな事を言ふと、えらい事になる。なあ、ばさま、さうぢらす？

おりき (茶を入れながら) あい。……だども、なんでやすねえ、供出と言ひば、こないだも實行組合の世話役だちで話し合つたが——農會でお旦那衆が割當て決めて下さるのはありがたいけど、とれ高が何依で年貢がいくら、世帯が何人で、かゝりがこれこれ、そのほか、軒別の割當てを決めるに就いちや、なかなかめんどろな事が有るが、そんな事を、みんな俺達の目の前で——つまり、おゝつびらに俺達に知らせて、どうしてや

つて下さらねえづらね？ みんな、さう言つてやした。お旦那衆と、わしらとでは暮しが、まるきり違ひやすからね、細けえとこにや眼が届かねえのはあたりまへぢやから、その何とか員、その、供出の委員會か、そいつに、村の……左様さ、地下の百姓を、なぜ入れねえかね？

玉川 そりや、ばさま、そいつは、ばさまの前だが、そんな簡單には行かんよ。これまでのしきたりが有る。永い間のしきたりを急に變へたりすると、かんじんの供出の成績がバツタリになつてしまふ。

おりき さうでやすかねえ？ 永い間のしきたりと言つても、そいつが、まづいと判りや變へちまつたらどうでやす？

玉川 だけどさ、地下のもんが供出の割當てをやるとなると、どうしても公平にならん。數から言やあ、小作や小さい田地持ちが多いからね、どうしても、そつちの味方をし、て、この、公平を缺くことになるでね。

おりき だから、お旦那衆の方からも出たら、ようがせう。そいで、よく相談してやつたら、えゝ。第一、小作や地下のもんが、そんだけ多勢なら、多勢のもんがうまくやつて行

けるやうに事を運ぶなあ、あたりめえで、そいつが公平にならんと言ふのは、俺にや、のみこめやせん。

仙助 へへへ。

玉川 そりやお前、無茶だ。世間は、そんなもんぢや無い。世間で、お前、十だけのを保持つてゐる者あ、それだけのわけが有つて持つてるんだ。三だけしきや持たぬ者あ、やつばしこれで、自分が怠けてゐたとか先祖がへまあやつたとか、ちやんと、それ相當の理由が有つて三つだけしか持てねえでゐるんだ。そこんとこのケヂメはちやんと附けとかん事にや、國家社會の、この秩序と言ふもんはメチャメチャになる。秩序と言ふもんはだな——わかるかね、ばさま？

おりき チツシヨウかい？

仙助 ハハ、へへへ。……俺あなんにもわからねえ人間ぢやが、ばさまの言ふ事が本當だと思ひやすねえ。大體此處いらぢや、十人の中で九人迄あ貧乏百姓で、あとの一人か二人しきやお旦那衆は居ねえもん。地下の者やドン百姓の爲めに計らつてやる事が、その、秩序をさ、亂すなんて言ふ事あ無えなあ。へへ、お旦那衆に都合の良い秩序は、

そりや亂れるか知らんが、この、此處いらの、つまり國民の秩序は亂れやしないよ。却つて、うまく行かあ。へへ。

玉川 生意氣な事を言ふな！ 現に亂れてゐるぢやないか、お前みてえなナラズもんが悪い事をして、こんな山の中に逃げ込んで來てゐるのを、こうして大目に見のがして置いとくとだ！ まつとうに働いても、貧乏で困る人間が言ふなら、まだ知らぬこと、お前なんぞが、どのツラさげて、そんなアゴタあ叩ける？ うん？ お前達にしてゐる事位、何から何までチャリンと知つてゐるぞ！

仙助 ……。へへへ、そりやあね、なんしろ——

玉川 チャーンと知つてるぞ！ 言つてやらうか？

仙助 へへ、そんな、お旦那！ へへへ、そんな殺生な……俺あ、なにも、好んでしてゐる事ぢや無えんだからのし……へへへ、そんな——

玉川 此處で言ふのが悪るきや、町へ戻つて、出るところへ出てつて言はうか……うん？

(間……)

おりき ……あい、お茶がへえつた。おあがりなんし。

玉川 やあ……。

おりき あい。

藤堂 ありがたう。

おりき 晝めしは、お前さま、すましたかえ？

藤堂 食べました。

(一同、熱い茶をすゝる)

おりき ……さあて、窓の口、開けるかな、サダ？

サダ あい。

仙助 ……へへへ、どうもなあ、さう言はれりや、一言もありやせん。へへ、しかしねえお旦那、自分で好きこのんでしてゐる事ぢや無え、みんな、この、暮して行けねえもんぢやから、へえ、悪いと知りつゝ……いえさ、へへ、善い悪いなんて事あ、俺なんぞにや、なんの事やら、わからねえからね。まあ、なんとなく、この、命をつないで行けそうな事なら、行き當りばつたりだあ、へへへ、やつておやすよ。なさけねえもんでやす、全く。だから、お前さま、國民精神總動員とあれば、役所のお先棒かついで

騙け廻つたしね、田地の賣買とあれば、歩きまわつて鞘を稼がしてはぐく、そのほか、なんでもやりやす。善いの悪いのと言つたとて、とにかく、そんな仕事があるんぢやもの。俺なんぞがしてゐる事あ、下つばの下つばの、たとへて言ひば、落穂う拾つてるやうなもんづら。それが悪いと言へば、ゴツソリ薙取つて持つて行く人達こそ調本人でやすからねえ、悪いと言ひ立てゝ見りや……いえさ、話がですよ、だらず？へへへ、……ねえ、お旦那、去年の暮にお旦那から頼まれて、赤嶽の奥から甲州の方へ材木積み出した時だつて、道あ酷えし、馬あヒヅメはがしつちまう、第一、お前さま、いくら用心しても、いつなんどき山林區の役人に出くわしやしねえかと思つてさ、ビクビクもんだ。へへへ、それで、お前さま、あんな思ひをしても、たかだか一車で百二十兩ぢやもん。へへ、善いの悪いのと言つて見たつて……俺が悪いもんなら、へへ、その、へへ。

玉川 そんな事を今言ひ出して——すると、なんだな——？

仙助 へへ、出るところへ出て言ふなんつ、お旦那がおつしやるからよ。出ると言ひば、俺だつて、仕方無え。どこへでも出やす。そいでまあ、はたかれりや、おいねえから、う

ぬのした事あ、した事だから、そりや、言はざならねえ。つまり、それを言つてゐるのでやす。こうして、目え開いて、耳あ聞へるからね、うぬが目で見たり聞いたりした事あ、喋らねえわけにや行きやせんからね。早い話が、海の口の崖下の条次郎んとこの腐れ倉の地下室でやすねえ、へへへ、あすこいらあたりで積んである米なんてもなあ、へへ、誰のもんだか知らねえけど、へへ——

玉川 そいぢや、あれを——どうして見た？

仙助 へへ、へへへ、いえさ、誰のもんだか、俺あ知らねえですよ。しかし、あんだだけの俵数の米が、いまだき、ゴツソリあゝしてしまひ込んであるなあ、いづれお前様、まつとうな筋のもんぢや無え事あ誰が見てもわかりやす。へへ、たゞ俺あ、なにも、だからつて、うぬの方からシヤシヤリ出て喋りちらす事あ無えからね、黙つてるまでだ。へへ、だらす？

玉川 ……私を、お前、脅かす氣か？

仙助 と、とんでも無え、そんな、お旦那！ あれが誰のもんだか、知らねえと言つてるぢやありやせんかい。へへ、そんな、へへ、へへへへ。ハハ。……たとへ、知つてゐた

としてもだ、なにも、此の俺が、經濟警察の役人ぢやあるめえし、へへ、自分から喋り立てゝも、なんのトクにもなる事ぢや無しさ……たゞ、出るところへ出るだなんて話になつたから、たとへ話に俺あ……へへへ。

玉川 ……そうか！ お前が、そんな風な出方をするなら——よからう、ようし！ ……ホエヅラをかくな、後で！

おりき (焚火をいぢりながら聞いてゐたのが、ユツクリと立上つて) なんか知らんが、口喧嘩あ、よさつし。ハハ、どれ、やるかな。サダ、來う！

サダ あい。

藤堂 僕にも見せて下さい。(木株に腰をかけ、まさかりの刃に指を持つて行つたりして、玉川と仙助の口論を聞いてゐたのが、これも立つ)

おりき だども、炭のホコリで眞黒になりやすよ。

藤堂 いゝんです。(先に立つて歩き出してゐる)

おりき (右手へ行きながら) 玉川のお旦那、窯開けだけ済まして來やすで。

玉川 えゝとも。ばさまにや、ほかにも少し頼みがあつてな。

おりき ちぎだあ。チョツクラ、ごめんなんし。(右手へ降りて行く) ころころ、サダ、そんなに
驅けるな、ぶつ轉ぶぞ、野郎！ ハハ！ ころ！ (右手下方からサダの明るい笑聲)

(間……)

玉川 ……おい蛸仙……お前、ホントに見たんだな？

仙助 ……なんでやす？

玉川 条次郎んこの倉をよ。

仙助 ……いえ、俺あ別に——

玉川 どうして……なんで、あすこに入つた？ どうして入れた？

仙助 へへ——そんな、何も、ハツキリ見たつて俺あ言つてや……へへ、まあ、いぢやね

えですかい。俺あ、なにも……その、そいだから、どうのこうのすると言ふわけぢや
無えんぢやし……いゝですよ、まあ——

玉川 よく無えよ！ 男らしく無えぢやないか、見たなら見たとハツキリ言つたらどうだ？

仙助 そ、そんな事言つたつて、お旦那の前だが、ハツキリ言へと言やあ、そら、言ふが
ね、そんな事したつて、なんになりやす？ へへ俺の見た事を一々ふれ歩いてゐた

日にや、キリが無え。戦争中こゝいらの良い衆のしてゐた事を一つ一つ言ひ立てた
ら、お旦那の前だが、へへ、キズの附かねえ人は大方、一人も無えづら。へへ、此處
の村長さんから村の議員さんだち、町の町長・助役・配給係り、それから警察のえれ
え人達、それから段々と上の方まで洗ひ立てゝ行つたら、へへ、まるでへえ、あら
かた、腹の痛え衆ばかりぢらす。……自分の権利々々で、それぞれ勝手にうまい事
やつてら。へへ、俺あ蛸だあ、あつちこつちに手え伸してゐやすからね、大概の事
あ知つてゐやすよ。だからまあ見たとも言へるけど——とにかく、なんでもかでもさ
うなんぢやから、これが、あたりめえと言へばあたりめえでやすからねえ、見なかつ
たと言へば、へえ、何一つ見なかつたとも言へるしね……へへ、今更、かくべつの
事あ無え。

玉川 ……よし、お前、いくら欲しい？

仙助 なんでやす？

玉川 だからよ、見なかつた——と言ふ事にしてだ、さうだ、——つまり、なんだ、それを
見なかつたと言ふ事にしてだ、いくら欲しい？

仙助 へえ、ぢや、やつぱし、あの米、お旦那のだね？

玉川 さあさあ、なんでもいゝから、話あ早いとこにしやうぢやないか。

仙助 いゝですよ。言ひ立てゝ見たつて、なんのトクにもなるぢや無し……へへ、見なかつた。俺あ見なかつたですよ、へへへへ。

玉川 サツパリしねえなあお前も。だからよ、だから、こりや私のホンの心持だから――

仙助 金あ要らんですよ。それよりもねえお旦那……へへ、その、駐在の松本さんなり、町の、もつと上の方の人にさう言つて、お旦那の力で、なんとか俺の事、なんとかこの、目こぼしにしてくれるやうに、へへへ。

玉川 なあんだ、早くさう言やあゝに。いゝとも、たかゞチツトばかりの米の闇位、私が簡単にもみ消してやるよ。ハハハ、それ位お前、ふだんから何のためにあの連中、餌さあおろして飼つてあるんだ。ハハ、案外お前も気が小さいなあ、いゝともよ。

仙助 違ふんだ、違ふんだお旦那！ 米の闇も米の闇だけど、いえ、その方も一つお頼みしてえけどね、それよりも、へへ、これでやす、これだあ。

玉川 え、鼻がどうかしたのか？

仙助 やつてる所へ踏ん込まれやしてね。

玉川 あゝ、花ばくちか。

仙助 へへへ、顔見られちやつたからね。現行犯だもん。町の仲三などゝ、へへ、なにしておやしたけどね、俺だけあ、三度目でやすからね。こんだあ、下手あすつと本式にくらひ込みやす。

玉川 なんだ、さうか！ そいでお前、こんな所に逃げ込んで来ておたんだな？

仙助 へへ、もしそんな事にでもなると、俺あまあいゝが、餓鬼共が路頭に迷ひやすからねえ、なんとか、そこんとこ、よろしく頼みやす。

玉川 全體、どこでやらかしておたんだ？

仙助 桑次郎の倉の地下室で、へえ。そこいもつて来て、どうして知りやがつたか、出しぬけに、この――

玉川 はゝあ、そいでか！ そいで、お前、あれを、見たんだな。さうか！

仙助 あんな、くされ壊れた倉の、誰一人近寄りもしねえやうな所だもん、まさかお前さま……いや、お旦那もうまい所を見附けやしたねえ！

玉川 そいで、あれに気が付きはしまいな、その連中？

仙助 そりや大丈夫だ。あんだけの丸太を積んだ下になつてんだからねえ。俺にしたつて、踏ん込まれて、びつくらして条次郎と二人でムチャクチャに丸太の間くゞつて、丸一日しやがんでゐてさ、俵あギツチリ並んでゐるもんで、なんだと思つて根掘り葉掘り条次の奴に聞いて、知つた位でやすからねえ、大丈夫でやすよ。……次の日の、暗くなつてからソーツと抜け出して、それからこつち、こうして山林小屋にかくれてゐました。へへへ、てつ、冗談もんだあ！

玉川 ……さうか。さうするちうと……

仙助 一つお頼みしやすよ、その、お旦那の方で……頼みやす。

玉川 ふむ……（考へてゐる）

仙助 お願えだ。なんしろ三度目でやすからね。へへ、ハッキリされるつうと、事だ。ねえ、お旦那！

玉川 ……よし、引受けた。私がうまいこと運動して、お前にや手を掛けさせねえ事にしてやらう。しかしだな——しかし、その代りだな仙助……代りと言つちやなんだが、あ

の米をだな、甲州の長坂まで運び出すのを、お前、引受けてくれんか？

仙助 ……へえ。……直ぐにかね？

玉川 うむ、そりや早い方がいゝ。しかし、さうだな、いや、お前の事件のホトボリが冷めてからの方がよからう。言ふまでも無えが、絶対に知れねえやうにだよ。絶対だぞ！知れると、私もお前も、えれえ事になるからな。

仙助 へへ、そりやお旦那、そこに抜かりは無えですよ。長坂でやすね？

玉川 一俵につき五十兩づゝ張りこまうぢやないか。

仙助 五十兩でやすかい？ そいつは、可哀そうだ、お旦那。せめて七十兩は出して貰はねえぢや——

玉川 まあそれでやつてくれ、悪いやうにはしない。後は後で又うめえ仕事か絶えねえやうにしてやる。實あ、今日此處にやつて来たのは、耕地拂下げの事と、そこから實は、大阪の方の銀行方面から大口に頼まれてな、此處らの山で焼いてる炭をソツクリ買ひ付けたいと思つて来たんだ。それにや此處のばあさんを先づ陥落させて、それから、ばあさんの手で此の邊一帶の炭を集めさせりや、わけあ無えからな。なんしろ、人望

が有る、この邊の奴等あ村長さんの言ふ事あ聞かねえでも、此處のばあさんの言ふ事なら聞くと言ふからなあ。なにがなんでも、取込まないぢやならん。

仙助 へえ……だども、うんと言ひやすかねえ？ ボクてるやうだが、あいで、まだまだ、じやうぶ、しぶてえばさまだから——

玉川 なあに、攻め道具は揃つてら。へへ。まあ見ておな。そいでだ、買付けが済めば、一時どつか山ん中にも隠して置くか、はじから運び出すかしなきやならん。そいつを、どうだ、お前に一手に引受けて貰はうぢやないか。いや、さうなりや、なにもお前が一々運送引つばる事あ無い。人夫をお前の手で集めて、そいつらに働かしといて、お前は監督だけすりやい。つまり坐つてゐて儲けられるんだ。

仙助 へへ、どうも、話あ結構でやすかねえ——

玉川 此處まで打開けて話した上は、私も真剣だぞ。いやならいやでいゝが、しかし今更お前が下手を足搔くと、チツトばかり、手荒い手段を採るからな。それは承知してゐて貰ひてえんだ。

仙助 いえ、そりや、いやだとは言はねえけどさ、その、警察の方の事は大丈夫でやすね？

大丈夫、うまくもみ消して——

玉川 大丈夫だよ、安心してゐな。ハハ、お前なんぞ此の私が、此處らのいろんな頭株の連中に、どこかで網を張つてゐるか、よく知らねえんだ。ハハ、こいで、私あ次の總選挙にや立候補するんだよ。なに、チャンと當選して見せる。そんな時あ、お前なぞにも運動員になつて貰ふ。さうなりや、お前も押しも押されもしない、立派な顔になれると言ふもんだ。

仙助 へへ、さうでやすかね。どうも——

玉川 しかしだ、こうなれば、くどいやうだが、そこまで組んで行くことになりや、もうへえ。一蓮托生だぞ。どんな事があつても一人勝手に寝返りなんかさせねえぞ。いゝな？ 千曲川の淵あ、いくらでも有る。變なことをすると爲めにならんよ。

仙助 へへへ、へへ、そりや、そんな事、俺あしねえけどさ、お旦那の前だけんど、いざとなつて、お旦那の方でだ、そんな奴あ俺あ知らねえで、ポイと放り出したりしやしねえでせうね？ それだ、俺が氣になるなあ、ねえ！ へへへ。

玉川 此方も洗ひざらい、ぶちまけて有るぢやないか。萬一そんな事がありや、お前だつて

黙つちやわまい。一蓮托生つうのは、その事だ、大丈夫だよ。

仙助 しかし大どこにや大どこで、俺達にや無え逃げ手も有りや、かくし札も有るんでやせう？ へへ、第一、いよいよとなりや、その、今言つた千曲川の淵と言ふ奴だ、だらす？

玉川 ハハ、そりや、たへだ、心配するな、大船に乗つた氣でゐな、ハハハ。

仙助 へへ、とにかく、ちや、頼みやす。へへへ、なんせ、俺だちみてえなチツボクなもんは、何につけても、しやう無えや。

玉川 ひがむ。これで、大きくなりや大きくなるで、お前等にや無え苦勞が有らあ。頭あ使ふしな。おかげで、こんなに禿げたよ。可哀そうに、いくつだと思ふ、これで。

仙助 へへへ、へへへ。

玉川 ハツハハハ。

(笑聲の中に、おりきが手からスタスタあがつて来る)

玉川 ばあさん、來た。炭のことうまくやるから、頼んだよ。

仙助 へい。へへへ。

おりき お待たせしやしたよ。……(後の谷へ振返つて)サダあ、あんまり急いで出て折らね

えやうにしろう！ (サダの聲が「おいよう、わかつてゐるよう！」と答へる)……どうしやした？

玉川 ハハ、なにさ、わしらなど近頃、あんまり苦勞が多くて頭あ禿げちやつたつて、笑つてゐたとこだ。

おりき ハハ、しかしお旦那ぞのお大盡が頭あ禿げるだら、わしらと來ちや、まる坊主になつてなきやなりません。

玉川 さうかねえ、そんな事あ無いだらう。近頃の地百姓の家なんて、食ひ物あ有るし金は溜つてるし、それこそ盆と正月が一緒に來たやうなもんぢやないのかねえ？ 町場のもんはみんなさう言つてゐる、町の者が食ひ物に詰つてゐるのを尻眼にかけて自分さえ困らなきや知らんふりして、白米たらふく食つてゐる——

おりき へえ、おら遠が、ね？

玉川 ばさまあどうか知らんが、一般のこの百姓がさ。腹の底から、うらんでゐるよ。

おりき そいつは、違ひやす。たまにや、強慾な、アコギな事をしてゐる衆も居るにや居ると

も、大概は、ほかにしやうが無くて、仕方なしに野菜など闇で賣つたりしてゐる者ばかりだ。さうぢやねえかえ？ ぢか足袋一足買つても百五十兩なんつする。種物も農具も肥料も、着もんも、何から何まで闇だ。いけねえと知つてゐても、そいつを買はなきや百姓はやれん。買はうと思やあ、どうで百姓だ、ほかにしやうは無え、作物ば闇値で賣つて金作るだ。すると町の衆は町の衆で、そんだけ高え作物買つて食つて暮してゐれば、金うんと要るから、足袋も農具も肥料もウンと高く百姓に賣りつけねえば、立ち行かねえ。グルグル、グルグルと、はてしが無え。つまりが、じゆんでんごうだ。……俺あ、四五年前に、ぢやうぶ混んでゐる満員の汽車に乗つて、えれえ押されてね、死ぬかと思つた事がありやす。つまり、あれだあ。誰も、へえ、人の事押してえと思つて押す人間は一人も居ねえ。だども、後ろから人に押されるから、仕方なくて、前の人を押すだ。みんなが、さうよ。じゆんでんごうだ。考へて見ると、人間なんて馬鹿なもんだ。一人々々はかしこい人でも、たくさん一緒になるつうと、人間なんつ、へえ、馬鹿なもんだ。

玉川 満員列車か、ばさま面白え事を言ふねえ。ハハハ。……ところで、ばさま、炭あ近頃

どうだな？

おりき 炭かや？ 焼いてゐやす。

玉川 いえさ、景氣はどんな具合だね？ 去年の暮の値上げで、だいぶ儲かるやうになつたづら？

おりき 左様さ、それまでの倍近くの公定になりやしたからね、だいぶ樂にやなつたけど、そんでも此處らあ大概雜木だからなあ、十五キロで八圓つうから、たかゞ知れてやす。そこいもつて来て、ぜんは窯前の賣り買ひだつたのが、あれから此方、一々板橋の山元まで運び出さなきやならんくなつたでね、手間あ見ると、先づ、ぜんと似たやうなこんだな。第一、原木げんぎが高くなつて、おいねえ。此處らの山でも、入札の値が、せんの倍だ。取る金が多くなりや出る金も多くなりやす、ハハハ、やつぱしこいつも満員列車で、どつちせ働いてゐるものふところ具合は相變らずだ、ピーピーしてら。さうかねえ。そいでゐて木炭不足で、あつちでもこつちでも大變だがねえ。もう少し、この、實際に炭を焼いてゐる連中のふところに利益が入るやうにしたらいふんだ。打つ手はいくらでも有るのになあ、今の役人なんて全く、大飯くらつてボンヤリ

ばかりしてゐて、すべき事あ何一つしないんだからね。

仙助 しかし、なんださうでやすね、炭一俵供出すると、米一合特配貰へるやうになつたつうぢやないかね？ さうとすりや、こんで悪かあ無え。

おりき 役場ぢやそんな事も言つてゐたそうだが、この秋あ板橋だけで二十軒の餘も炭焼いてる内が有るが、米の特配貰つたと言ふ話あ、まだ聞かぬえ。これから呉れるか知らんが、どんなもんやらね。これまでも、ちか足袋くれるの、手拭ひ呉れるのと言つても、めつた呉れた事あ無えからの、當てにしてると、とんだカスを食はあ。もつとも、無くとも濟む酒だきや、こないだ特配があつた、ハハハ。

玉川 それだ、今どきの政府や役人のする事は！ しなきやなら、肝心の手は少しも打たねえで、せずともいゝ小刀細工ばかりしてゐるんだ。そのために、こんな事になつてしまつたのに、まだ眼がさめないんだ！ 實際、なんと言ふ！ 四等國と言はれても仕方が無いよ。これぢや、なんの事あ無い、五等國六等國、いや、野蠻國だ！ こうなると、われわれ國民も今の政府の言ふ事ばかり聞いてゐると、今にどんな目に逢はされるか、わからん！ なあ、ばさま、さうぢやないか？ もうへえ、聞はいけぬえの

何は悪いのと、そんな小さな事にこだわつてゐると、百姓は肥料も手に入らぬえで作物あ、あがつたりになるし、町の者あ食ふ物なくなつて、くたばつてしまふぞ！

おりき 左様さ、理屈あ俺達にやわからぬえが、なんでもえゝから、なんとかして貰はんと、あつちもこつちも、へえ、バツタリになりやす。

仙助 炭なども、なんだな、買ひてが有つたら、國民相場つうところで、ドシドシ賣るだなあ。

玉川 どうだらう、ばさま、わしはチョット頼まれた先が有つて炭を集めてゐるが、どうだえ、ばさまんこの、わしに賣つてくれんかな？

おりき おら所のをかね？
玉川 それに、どうせそいだけぢや足りんから、その板橋の二十軒の炭を全部貰はうぢやないか。ばさまから皆の衆に話をしてくれてさ。

おりき へえ……だども二十軒からの炭となると、随分の數になるが、なんにしやす？

玉川 そりやお前……ハハ、いや、何百俵でもえゝ、多きや多い程結構だよ。それで、値段は察前で十五圓と張込まうぢやないか。

仙助 へえ、すると、山元值段の倍でやすね？ 窯前渡しで十五圓なら、運賃や手間あ見ないですむから、窯主あ、先づ三倍の儲けか。ポロイ。へへ、俺なども一つ運送など引つばつてるのよしちやつて、炭焼きになるか。

玉川 お前などに焼けるもんかい、炭が。はじからクネクネひん曲つてしまわあ。ハツハハ。どうだえ、ばさま？ さうして呉れりや、ばさまにや口き、料として、取引高の五分づゝ、天引きに拂はうぢやないか。つまり口錢だ。

おりき 俺にかえ？ ハハ、冗談もんだあ。

玉川 冗談であらすか、本氣も本氣——（内ポケットから、膨らんだ紙入れを出し、手の切れるやうな百圓紙幣の束を出して、バツバツと音をさせて勘定しながら）……話あ早い方がいいや、な、ばさま。此處いらぢや、ばさまが、こうしやうぢやないかと言へば、みんなウンもスウも無えんだからな、ハハ。……ばさまの堅い事あわしが知つてるから、證文なんか一切抜き、信用取引と行こう。はい、今日は内渡しとして三千圓。さ！

おりき こんな錢を——俺がお前さま——そいつは困らあ。

玉川 その中から、ばさまの炭の分やほかの衆への内金や、ばさまの口錢、どんな風にしや

うと、ばさまに委せる。どうで直ぐに全部拂ふから、そんな時に清算するからな、まあ今日は一つ、氣良く受け取つてくんな。

おりき 困 やす。俺あ、へえ——

仙助 へへ、紙幣束あ貰つて困りやすは、よかつた。困りやすなら、ばさま、そこいらに、

ぶつちやけてくんな。とんだお前、秋の信濃の山奥で、枯木に紙幣の花が咲くべし。

玉川 そいつを蛸が拾ひにかゝるか？

仙助 圖星だあ！

玉川 アツハハハハ。

仙助 ハハ、ヘツヘツヘへ！

（その笑声に混つて右手下の方から、サダの笑声。サダと藤堂があがつて来る。サダは眼だけを出してスツボリと頭と顔の全部を包んだ手拭を取りながら）

サダ フツフ、ホホホ、ハハ。

藤堂 なんです？

玉川 さて、話あ出來た。な、ばさま！

おりき どうも、へえ——

仙助 そいつは、しまひなんし。ふところに入れて、喰ひ付きやしめえ。さあさ！

サダ フッフッフ。

藤堂 ……僕の顔が、どうかしたんですか？

サダ あれさ！ そんな、こすり廻すと、ハハ、尙のこと真黒になりやすよ。あれまあ、見なんし、言つてるそばから真黒だ。

藤堂 ハハ、いやあ、いゝですよ、いゝですよ。

おりき ふわあ、まるで、へえ、おびんする様だ。アツハハ、言はねえ事ぢや無え。窓あ開けるのに面あむき出しぢや、たまつたもんであらすか。サダもまた手拭でも貸してあげりや、いゝに。氣の利かねえ。

サダ だつて、おらの一つしか無えもん。……ヂツとしてゐなせ、はたいてあげやすから。

(手拭で藤堂の頬を拂つてやる)

おりき 待て待て、下手あすつと眼にへえる。どれ、手拭おらによこせ。

サダ あい。……ばさま、それ——？

おりき うむ、こりや——(へと、無理に渡されて手に持つてゐた紙幣束に眼を落す)——えゝと……こいつは困りやすから、どうぞまあ、そちらへ——

玉川 もう、なんにも言ひつこ無し。ハハ、くだい話あ、わしは生れつき嫌ひでねえ、アツサリしやうぢやないか、ば。ま。

おりき 困つたの。……俺あ、へえ、こんなもん渡されても、どうも——

仙助 此處だけの話にすればよからず、ばさま。聞いてる者あ、こんだけだ。なにもさう、しちつ堅い事言はずとも——そんな、話のわからねえばさまでも無えづら、よ！

おりき おらんとこぢや、供出に出しやす。ほかの衆はほかの衆でどうするだか——そりやお旦那の方から話して見て下せえ。

玉川 ……さうかい。しかし、供出などに出してゐたんでは儲からねえと、先刻ばさま自分で言つてたぢやないかね？

おりき へえ、儲かりやせん。

玉川 そんなら、なにも、みすみす意地を張ることあ無えと思ふがなあ。

おりき ハハ、儲からねえのは、今に始まつた事ぢやありやせん。戦争中も、今こんな事にな

つて來ても、まるつきり同じだ。

仙助 だからさ、少しはこの要領よくやつて、儲けたらいいぢやねえかい。

おりき ヨーリヨウウかや？ ヨーリヨウウたあ、なんだえ？

仙助 わからねえなあ。だつてさうぢや無いかばさま、俺達コツコツ働いてる人間がちつたあこの、利益を掴んでだな、少しは良い目も見ろなあ當然だらす？ また、さうなつてもいい時代になつて來たんだあな。

おりき そりやな、良い目は見てえよ。……だども、蛸仙なんつ男が、そつたら事言ふのは、チヨツトへんだぞ。お前、なによ働いてるや？ 一月に三日か四日運送引つばるあとは、ヨタかチヨボイ働いてるづら？

仙助 かなわねえな、このばさま！ そんな、そんなお前——

おりき アツハハハハ、第一、ぬしあ、急に玉川のお旦那の加勢するが、フフ、するつうと、なんかこの良い目の話が出来て、お旦那のゼゲンも働くかや？

仙助 チツ、この、くそばさまあ！

おりき およよ、このばさまあ、クソでもミソでも掴むがな、こんなもん掴むなあ、あんまり

馴れてねえ。ハハ、この錢あ、どうぞまあ、そちらへ。

玉川 ……いや、お互ひに呆けるのは、いゝかげんにしやうぢやないか、ばさま。私あ、まじめな話だ。あとあと、決して悪いやうにはしねえ。現にだな、耕地の拂下げを受けるにしたつて、あれでいくら安いと言つても二千や三千はどうしても要る。そりや、それ位の金あ、チャンと有るにや有るだらうが、そりや又それで、有つて邪魔になるもんぢや無しさ。

おりき へえ、俺んところぢや、錢あ無え。

玉川 そんなら尙の事ぢやないか。いよいよ拂ひ下げだ、錢あ無い、では、どうする氣だね？ え？ 私あ、ひとごと。は思へねえから、心配してゐるんだ。どうするんだな？

おりき ハハハ、そんな時になりや、なんとかなるべし。拂ひ下げの田地あ、どうで畑かタンボだ、まさか、あそこへ御殿ぶつたてるわけぢや無え。畑かタンボなら、へえ、どう轉んだとて、どつかの百姓が物う作るんだ。心配することあ無えよ。

玉川 だからさ、そこを私あ言つてるんだ。耕地だから、それを實際に於て耕作する農家の所有にしたいと思ふのは、こりや當然だ。だからさ、その、農家にとつてどうしても

必要な田地を買取る金をだね、何とかして作らうと言ふ場合にだね、その農家の生産物、つまり米・麥・野菜・そいから此の炭などをだ、應分の代金——つまり時價で賣つて金を拵へると言ふのは、こりや、やむを得ない、當然の事であつて、誰に對してもはゞかる點は無いと、私は信じてゐる。大體、こんなインフレになつてだ、諸物價があがつてゐるんだ。それを少しも考へないで、役人が机の上で決めた公定價額を、たゞ一方的に守らせやうと言ふのは、こりや無茶だ。いゝかね、ばさま！ それよりも、そのインフレそのものを何故おさへやうとはしないんだね？ そいつを放つといて、或る種の物資の値段だけを、おさへやうとしたつて、そりや出来ない相談だ。大體、政府のやり方なんてものは、まるでもう、一から十まで成つて無いんだ。縣の當局にしたつて同じこと！ あれもいけない、これもいけないで一切合切を法律や法規でがんじがらめにして、そいつを守らうとでもしやうもんなら、忽ちあつちこつちと突當つて、手も足も出なくなる。國民はお前、なんにもしないでボカメとしてゐた末にかつえ死んでしまふほかに仕方が無くなつてゐるんだ。もうへえ、私等國民は、今の役人なんつもんを信用するわけにや行かんのだ！ さうならず、ばさま？

わかるかね、私の言ふ事？

おりき

……そんなもんでやすかねえ？

玉川

さうなんだよ！ もう、こいだけ役人からだまされりや、もうへえ、たくさんぢやないか！ 早い話が米・麥の供出だ。戦争中、勝つためだ勝つためだと言ふんで——飯米までゴツソリ供出して来た。それがみんな嘘だつたんだ。私等あ、だまされてゐたんだ。こりやつて散々に敗けちまつて、やつとそれがわかつた。さうならず、ばさま？ (先程から切株に腰をかけて此の場の話を聞いてゐる藤堂が、下を向いたまゝだが、次第に氣持をつゝかれ、無意識に足元の小枝を取つてはビシリビシリと折つてゐる。その段々に青く緊張して行く横顔を、サダが落葉を焚火の方へ掻き寄せながら時々見る)

おりき

左様さ、だまされてゐたらしいな。だども、それもしやうあるめえ。俺達の方も、へえ、だまされる程の阿呆だつたんぢやからな。ハハ、第一、戦争つうのは、人間と人間が殺し合う仕事ぢや？ 殺し合ふ仕事をおつはじめたのぢやもの、そのために人をだます位の事はヘツチャラですべ。今更だまされたと言ひ立て、腹あ立てる事あ無えづら。人をだますのは、いくさの定法ぢや、腹あ立てるなら、第一にいくさをおつ

はじめた奴に立てるがえい。

玉川 だからさ、だからこの俺達をだましてだ、事實を俺達から隠蔽して、戦争を始めた奴がゐるんだ。おたんだ。今でも居る。つまり、こうなつてからまで、自分はヌクヌクと坐り込んで、やれ同胞愛だの、新日本建設だの、えらそうなゴタクを並べて、この上俺達をだまそうとしてゐる連中だ。ね！ そんな連中の言ふ事をヘイコラ聞いてゐる事は無いと言つてゐるんだよ！

おりき ……だども……だまされた、だまされたと言ふが、お旦那あ、いつ、だまされやんした？

玉川 そりやお前、いつのかつと言つたつて、戦争中ノベツぢやねえか。一から十まで、だまされて來てるんだ、われわれ農民は。

おりき やすかねえ？ しかしお旦那あ、地主さまのお大盡だあ。ノーマンと言ひやしても、歟あ握つて百姓なすつた事あ無えづら、ハハハ。

玉川 そりや、そりやお前、私の言ふのはだな、自分一個の、この、狭い立場から、この利己的に言つてゐるんぢや無くて、私もこれで農村に住んで多くの農村の指導をしてゐ

れば、農民大衆の立場に立つて、農民の生活のために考へるのは當然ぢやないか。つまり、それを言つてゐるんだ。即ち、だからだな、もうへえ、米麥にしろ炭にしろ、國民相場で賣るのは、農民として當然なことだし、第一、さうしないぢや、農村は立ち行かなくなつてゐる。私は心から心配して言つてゐる事だ。

おりき ハハ、心配して下さるのは、かたよけねえが、俺の内ぢや、米麥も炭も野菜も闇で賣つた事あこれまで一度も無えけど、チャンと立ち行つてゐやすがねえ。

玉川 ぢや、どうしても不承知なんだね？ 日が短いんだ。それに私がわざわざこうして來てる。不承知なら不承知で、私にも覺悟があるんだから、ハツキリ言つて貰ひたい。

おりき 左様さ、俺もこれからまだウンと原木切り出さねえぢやなりやせん、日が短かくなつて困りもんだ。ハハハ、少し薄暗くなつて來ると、俺などのモーロクまなこだと、木の根っこ切りつけたつもりで石つころねらつたりしやす。ハハハ、もうへえ、こう年い拾つちまつちや——

玉川 (相手の言葉をたち切つて、怒鳴る) 黙らんかいッ！ ……おとなしく相手になつてゐると良い氣になつて、そらッ呆けてばかりゐる！ 甘く見るのもいゝかげんにしたらど

うだ、私を誰だと思つてゐるんだな？

おりき……へえ？

仙 助 全くだ、へえぢや無えよ、ばさま！ お旦那がこいだけ御親切に言つて下さつてゐるの、わからねえわけぢやあるめえ？ なにも、いやならいやでいゝから、そんなヌラリクラリとお前、意固地なことばかり言ふ事あ無からう。俺あ——

藤 堂 どう言ふ事なんですか？ 差出がましいやうですが——

仙 助 お前様あ黙つてゐて下さいよ。

藤 堂 しかし——（内心の怒りが眼を光らせてゐる。ハラハラして思はず立上るサダ）

仙 助 しかしもへちまも無えんだ。なあ、ばさま！ 玉川のお旦那が此處までおつしやると言ふなあ、これでなんだ、よくよくの事でやすよ。だかす？ ばさまも大概、いゝかげんにしたら、どうだや？ 俺などが、よけいな口を利くやうだが、こんな事で、今後お前、何かにつけてだ、現に拂ひ下げの一件にしたつてだ、まづい事になつてしまふと氣の毒だと思ふから、俺なんぞもこんな事も言ふわけよ。だらす？ ばさまよ！
（その顔と玉川の方を心からの憎悪をこめてサダが睨んでゐる）

（間……）

おりき

……（静かな、シミジミとした句調）さうかや。……そんなら、俺も、へえ、まともに言ひやす。……ドン百姓のモロク婆が、理屈げな事言ふのも、へえ、こッぱづかしいと思つたもんで、言はんかつたが——仕方無えから、言ひやす。……先程からお前様だちの言ふ事聞いてゐると、戦争中、おかみぢや、勝つためだ勝つためだと言つて供出させたが、こうしていくさあ敗けちまつた……つまり、俺達はだまされてゐた。だから、もう供出なんぞしねえでもいゝ、供出なんぞしねえで、米も麥も炭も闇賣をしてもかまわんと言つてござらあ。さうでやすね？ ……んだども、ようく、この御自分 胸に手を當て、思ひ出して見なせえ。戦争中、俺達をつかまへて、勝つためだ、コクサクだあ、なんでもかんでも洗ひざらひ供出しろ供出しろ、供出をいゝがる者あ國賊だと言つて俺達をおどかしたなあ、お前様だちづら。現に、玉川のお旦那、お前様が村の實行組合の寄合にござらして、エンゼツばして、俺達をがなり飛ばしなかつた事を、俺あ憶えてゐやすよ。……いえさ、俺あ、それを今更とがめてゐるんぢや無え。あん時あ、あんなもんだつたづら、誰にしたつて。たゞ、あの時分あんな風だつ

たお前様が、いつ、今のやうにおなりやした？ お前様だちあ、全體、なん度トンボ返りを打ちや、氣が濟みやす？ それを俺あ聞きてえ。……だまくらかした、だまくらかしたと言ふが……そりや、上に立つてる偉い衆たちも嘘ついてゐたかも知らねえが、その手先になつて俺達をだまくらかしたなあ、お前様だちや無えんでやすかえ？ しかも、それがウヌの金儲けのためだ。出世のためだ。いえ、俺達が、いくら阿呆でも、それ位わかりやすよ。ハハ、(沁んだ殆んど泣いてゐるやうな笑ひ聲)なん度でもお前様だちあトンボ返りを打ちなせえ、ハハ……。だども、俺達ドン百姓は、トンボ返りの打ちやうが無え。どうひつくり返つて見ても、足あべトン中ぢやし、手は鉞に行かあ。朝から晩までセツセと作物拵へちや、日本國中の人に、それを喰はせてやりやす。戦争の前も戦争中も戦争濟んでも、まるつきり同じだあ。變りやうが無え。百姓の量見なんつもんは、いつでも、まるつきり變りやうが無えんでやすよ。特別に戦争ぢやからと言ふんで作物作つて食はしてやるんぢや無え、また、あやつは嘘つきぢやから食はしてやらねえの、嘘うつかねえから食はしてやると言ふんぢや無え、みんな人間ぢやから、食はしてあげるんでやす。……でやせう？ 俺達百姓が、食べ物

作つてやらねえぢや、誰が澤山の人さまあ養つてやりやす？ 日本國中なんで暮しやす？ 俺達が米麥供出しねえと、みんなが、ひもじい思ひ すらあ。んだから、供出しやす。理屈あ無えさ。供出や配給の事がうまく行かねえのは、係り係りの人達が間違つたところを直して、もつとチャンとやりや、よからず。そんだけだ、理屈あ無え。こうして俺が炭い焼いて供出するのも、町の人達が冬になつて火も無くては寒い思ひをすべし、おまんまもたけめえと思ふからだ。そのほかに、なんの仔細もあらすか。供出の値段ぢやと俺達あ苦しいが、まあまあ、やつて行けら。たとへ、やつて行けなくても、炭い焼いてるな、なにも俺一人ぢや無えからな、いよいよ公定ぢややつてけねえとなつたら、みんなで値段をあげて貰やあよからず。……んだから、お前様に炭賣るなあ、ごめんこうむりやす。そりや、俺だとして、なま身の人間だあ、錢あほしい。ほしいけど、お前様に二十兩で賣りや、お前様あそいつを二倍か三倍に賣りやんしよう、それをリ何人もの人が間に入つて、しまひに一俵百兩にも百五十兩にもなるでがせう？ 百兩も百五十兩も出して炭一俵買へるなあ、ウンと金持つたお大盡づら。お大盡にや、俺あ用は無え。俺の焼いた炭あ、町方の貧乏な衆に使つてほしい。

んだから、お前様だちに賣るなあ、おことわり申しやす。へえ、もうお歸んなせえ。
玉川 ……ふん、さうかい。フフ……（と無理にせゝら笑つて）そりや、お前などが、そんな
利いた口を叩いて落着き拂つて居られるのは、戦争中、うまい汁ばかり吸つてゐて、
ホントに痛めつけられた事が無えからだ。だまされて、戦争のために、何もかも奪ひ
取られた人間が、そんなお前、落着いて居れやせんよ！ 馬鹿な！

おりき ハハ……（寂しい寂しい笑ひ）左様さ、さう言やあ、そんなもんかも知れねえ。……し
かし、戦争で俺んところや、息子二人、とられやしたよ。かしらの奴は滿洲、おとぼ
うの小僧は、ガダル、ダガル、ガ……あんでも、そつたらとこだ。ハハ。……なんに
も取られたもんが無えからだとおつしやられても、へえ、……お前さま、自分に子供
持つて見さつし。まして、ウヌが腹あ痛めた小僧を、とられちまつた母親の胸の内は
なあ……花が咲いても思ひ出しやす、雪が降つても思ひ出しやす、風が吹いても思ひ
出しやす。木の枝で鳥がガアと鳴きや、心の臓キリキリして、地びたの果ての所まで
突走つて行きたくなりやす。

藤堂 おばあさん……（泣いてゐる）

玉川 ……ふん、それなら、尙の事ぢやないか。さうだらう、そいつが、みんなだまされ
て——

藤堂 黙れッ！（スツと立上ると共に涙聲のままの噛み裂くやうな叱咤）……きさま達あ、歸れ！
そこで、いつまでも下劣な事を言つてゐると、俺が——俺が捨て、置かんぞ！ きさ
ま達みたいな奴が居るからこそ——きさま達あ、きさま達あ、豚だッ！ 耻を知れ、
豚め！（一同、氣を吞まれて、シーンとしてしまふ………間）

玉川 ……フフ、君あ誰だか知らんが、ハハ、昂奮して、だいぶ、きいた風な事を言ふ。あ
ゝ歸るとも。しかし私がこのまゝ歸ると、ばあさん、お前さんの方で後で困る事が起
きるが、それでいゝだらうね？ 私も海の口の玉川だ。此處まで話をぶちまけて話し
たあげく、こんな事になつて見ると、これはこれ、あれはあれで別々に扱つちや、ま
あ、居れないからね。拂ひ下げ耕地の事は、まあ、手を引かせて貰ふからね。お前さ
んの内の分も板橋の衆の分も、私あ知らんから。

おりき ……さうでやすかい。（最初渡された委任状を懐中から出し、それに手に持つてゐた紙幣束を
子供に芋でも包んでやるようにクルリと包んで、まん中をおひねりにして、玉川に差し出す）へ

さ、お返ししやす。

仙助 ……(キヨロキヨロと双方を見くらべつゝ、おりきの渡した紙包みを受取つて玉川に渡してやりながら) だども……なんだなあ……まづいなあ。なんとか話をまとめてさ、でない
と、お前の方で困ることになるがなし、ばさまよ？ するつうと、なんでやすかね
(と玉川に) お旦那が手を引くとなると、下手あすると、板橋へんの内にや拂ひ下げと
しねえと言ふ事になりやしやせんかね？

玉川 そりや、先づ望みは無くなるな。さうで無くても、ほかゝらの申込で一杯だからな。

仙助 さうか、そりや……。なあばさま、お前もさう片意地な事ばかり言つてねえで、なん
とか、この、お旦那にお願い申したらどうだえ？ 田地の少ねえ此處いらで、三段で
も五段でも手に入る折なんぞ、この先ありやしねえぞ？

おりき ……。(シヨンポリと焚火の所にしやがんで返事をしない)

仙助 ……お旦那も、なんとか、もう一度、考へて下せえよ。農家に取つちや、田地の事
あ、お前さま、ウスの命より大事な事ぢやからなし。なんとかして、この——第一、
お旦那あたりが手ば離してしまふと、忽ちこの、農民組合がキツト割込んで来て、問

題にしてしまふ事は見えすいてゐるだから——

玉川 問題にするなら、したらえよ。お前は先刻から農民組合々々々と、そんな事ばつ
かり言つてゐるが、組合がなんだ？ 戦争中、手も足も出ねえで、ペコペコしてゐた
奴等が、こうなつたもんで、良い氣になつてシヤシヤリ出て來やうと言ふんだらう
が、どうでモグラみてえな連中だ、たかゞ知れてら。

仙助 そりや、いけねえお旦那！ 農民組合なんかどうでもいゝけど、地百姓にとつちや田
地が手に入るか入らねえかは、言はゞ、生きて行けるか生きて行けねえかの問題でや
すからね、たかゞこれ位の事で、こつちの話までぶちこわしにして貰つちや困りやす
よ。

玉川 だつて仕方が無えぢやねえか！ 御富人達が要らんと言ふものを、なにも私等がシヤ
シヤリ出てお前——

仙助 違ひやす！ そいつは違はあ。俺あそれで百姓こそしてゐねえが、まあ、年中ピービ
ーしてるしね、百姓の内輪あよく知つてゐるから、人ごとたあ思はねえ。お旦那が拂
ひ下げの事に乗り出したのが、この次ぎの選挙のための人氣取りか、又は金儲けのた

めか、そこんとは、偉い衆達の腹ん中までは、俺みてえな人間にやわからねえけど、俺達に見りや、こいで、この問題が地百姓に都合の良いやうに運んで貰はんことにや、いかんと思つておやす。利いた風な口を叩くやうだが――

玉川 さうよ、利いた風な口を叩くんだお前なんぞが。ハハ、そりや、お前なぞ、コソコソと闇買ひやゼゲンで食つてゐるんだから、言はゞ地百姓の寄生虫みたいにして食はして貰つてゐるんだからな、そりや人ごとゝは思へんのは無理あ無い、ハハ。

仙助 寄生虫は、ひでえや。そんな事言やあ、お旦那だつて、現に闇をしてるぢやないかね？ それも俺達みてえなチツボケな事ぢやなくて、ゴツソリとお前さん――

玉川 あゝ、してるよ。してゐても、なにも私あ悪い事をしてゐるとは思はん。だつて、さうぢやないか、第一、戦争中、闇取引を一番大がりにやつた親玉あ、軍部だぜ。えらい軍人だぜ。しかも、闇でごまかされてしまつたなあ、國民全體だ。見る、戦争中とは限らない、終戦の時、大口の物資を自分達のふところにさらひ込んだのは、軍だ。現に今でも、此の縣だけでも、米だけでも何百石と言ふもんが、ごまかされて、どつかに隠してあると新聞に出てゐたなあ、知つておやう？ 私等がチツトばかりの

闇をしたつて、それを悪いと言へる者が、どこに居るんだ？

仙助 ……すると、なにかね、条次んこの倉にあるお旦那の米も、軍部かなんかの――？ いえさ、悪いとは思はねえとお旦那がおつしやるから、悪くねえなら、なにも、おほつびらに言つたつて――

玉川 ハハ、又お前、私を脅しにかゝる氣だな？ よしよし、脅せるもんなら脅して見る。

仙助 さうと決れば、私も、お前の事で警察方面に運動するのは、ごめんだ。

玉川 そ、そりや、今更になつて、そりや酷だ。

仙助 酷だらうと何だらうと、お前の心からで、仕方が無えさ、ハハハ。

仙助 ……さうかい。……お旦那がその氣なら、俺も覺悟を決めやせう。仕方が無え、自分のした事のむくいだ、喰ひ込みやせうよ。だども、言つとくがね、俺お旦那のしてる事あ大概知つてゐるからね、戦争中からこつちズーツと旦那がどんな悪どい事してるか位、俺あ――条次んこの米や、材木の事なさあ、大した事ぢや無えや。ハハ、だらす？ 供出米の事で農會の旦那衆がどんなうめえ事やらかして來たか、そのほか、肥料や農具の配給ごまかしてさ、そいつがばれそうになつたので、警察から裁判所の

方まで手を伸してさ、金え掴まして、去年の夏など上山田温泉の笹屋へんで、ダダラ遊びをきめ込んでよ、へへ……どうで自分が喰ひ込むとなりや、ついで的事だ、へへ、知つてる事あみんな喋つてね、へへ、そいで——

玉川 (ビシリと仙助の頬をなぐる) 野郎!

仙助 ツー……なぐつたな!

玉川 なぐつたが、どうした? この蛸め! くされ蛸! この! (仙助が崖の方へ退つて行くのに、のしかるやうにして二つ三つ四つとなぐる) くたばつてしまへ! きさまなぞあ!

仙助 畜生! (その相手の片手を掴んで、反撃に出やうとする。しやがんでゐたおりきが、この時、

まさかりを取つてフツと立上り、スタスタ近寄つて来る)

サダ ……(玉川と仙助の口論に氣をとられてゐたのが、ヒョイとおりきの方を見て、ドツキリ、細を

裂くやうな聲を出す) あッ! ばさまッ!

(短いが、一同が化石してしまつたやうな間。……サダの叫び聲で一瞬立停つてボンヤリそちら

へ眼をやつたおりきが、再び崖の方へ)

玉川 ……な、なんだ? (恐怖で動けなくなつてゐる)

仙助 ばさま! お前——(これは眞青になつて、チリチリ退つた足が崖端を踏みはずす) あッ!

(ズルズルツと落ちて行く身體。落ちまいために、掴んでゐる玉川の手を持つて、引きずり落すやうな形になる)

玉川 あッ! 離せ! 畜生! (叫びながら、仙助と殆んど同體に崖の急傾斜を轉げ落ちて行く。

一緒に轉落する石ころの音) わーッ!

仙助 助けてくれーッ! (二人の悲鳴は一瞬の内に下方はるかに小さく微かになる)

サダ あらあらッ!

おりき (崖のはるか下の方を見ながら) お、お、へえ!

藤堂 ハハ、よく轉がる!

サダ フッフ! まるで、へえ、ダンゴが轉がるみてえ!

おりき んだから、言はねえこつちや無え、此處の崖、踏みはずすと——

サダ だつて、ばさまが——妙な顔して、向つて行くだもの、俺までハツとした。

おりき なんだ?

サダ あの衆が、あんまりイヤラシ事ばかり言ふもんだ、ばさま腹あ立てちやつて、んでさ、その、まさかり掴んでんだもん。

おりき うん？（と持つてゐるまさかりに眼をやつて）……これで、へえ、チョン切るかと思つたかや？

サダ 出しぬけだもんで、ドキンとしたよ。

藤堂 いや、ホントにぶつた切つてやりやよかつたんですよ。

おりき フフ、ハハ、ハハハ、フフ、俺あ、べえ、木い切らうと思つてな。あやつら相手にしてゐたんぢや、日が暮れる。

サダ フフ、俺までびつくりした。……あらあら、あんなとこまで轉けて行つた。もう直ぐオongo川だ。……どうしたづら、二人とも動かなくなつた。……死んだんぢや無えかな？

おりき ……なあによ……ほれ見、動いてら。（口に掌をかつて下方へ呼びかける）おーい、けがは無えかよーう？

サダ フフ、まるでへえ、虫けらみてえ！ あら、また、こづき合つて喧嘩あしてる！

おりき なあによ、川あ向うへ渡らねえ間に仲直りすらあ。

サダ 蛸仙野郎、遣ひすり廻つてなんか搜してる。

おりき ……さつきおつことしたハンゴウづら。

サダ ハッハ！ おやおや、こんだ二人して此方向いてなんか言つてら。（谷へ向つて叫ぶ）阿呆たれーえ！

おりき そつたら事、言ふな。……（シミジミと）あれが日本人だ。……あれが、この俺達の正のそこだあ。……ウスが量見まちがつて人に喧嘩あしかけどいて、とうどう崖からおつこちて、そこで又掴み合つてる。……（いとしげに）……あれが俺達だあ。

（間……）

藤堂 ……おばあさん——ありがたう存じます。

おりき うん？

藤堂 ……先刻から、あの二人を見てゐて、僕あ實は——これを大きくしたのが、今迄僕等をいゝやうに引きすり廻して來た上の連中ぢやないかと言ふ氣がしました。すると——やつぱり、負けた方がよかつたと思ひます。下手に勝つたりして、やうもんなら、

いつまで経つてもあんな風な連中が上に立つて、本當に元も子もなくしてしまつておたと思ふんです。負けたゝめに今後、どんなつらい目に逢ふとしても、それでもまだ、この方がよかつたといふ氣がシミジミとしました。

おりき 左様さ……そりやこの方がよかつた。負けたくはなかつたけど、しかし、負けの方がよかつた。(何度もうなづいて)……俺あそう思ひやす、それに氣が附いただけでも、へえ、戦争のおかげだ。それに、お前さまも先程言はせつた、國のためなら笑つて死なうと思ひ込んだ心持が、なんで此の後も、そのまゝに消へて無くなるもんで無え。人間、一所懸命になつてやつた事あ、無駄にやらねえもんだ。さうだとも。へえ、戦争から俺達あみんな、かけがへの無え大事なもんを拾つて來てわやす。そいつを忘れちや、ならねえ。

藤堂 わかりました。

おりき ……なんで泣きやす?

藤堂 いや、僕あ——

おりき ハハ。……まあ、よからず。先づまあ、お山あ見なせえ。……な！ あの向ふにや、

お前さまのおふくろさまが、チャンと見てござらつしやらあ。おふくろさまあ、死んだつうけど、なに、なんで死なつせるもんかよ、チャンとお前さまを見てござらつしやらあ。

藤堂 ……はゝ。

サダ ばさまだつて涙あ出してるぞ。

おりき なによ、嘘うこけ！ ハハハ、さあて、又やるかな。(崖ふちの木立の方へ)

藤堂 僕も一つ——(もう一丁のまさかりを取つて、そちらへ續く)おばあさん、僕を二二ヶ月、お宅に置いてくれませんか。納屋の隅でもどこでも結構です。

おりき 内にかえ？ うむ、そりやいゝけど——そいでなによ、なさる?

藤堂 おばあさんに百姓仕事を教はらうと思ふんです。

おりき 又、教はるか、ハハ、冗談もんだあ、なあサダ。

藤堂 冗談では無いです。

サダ フフフ。

藤堂 ね、いゝでせう？ 願ひです。ガダルカナルの道雄さんが、歸つて來たと思つて、

僕を――。

おりき 道雄かや？ ……あの小僧……（フツと考へに沈まうとする自分を打切るやうに）ハハ、よしよし、よからず。あい、好きだけおいで。

藤堂 いゝですね？ ありがたい。よし！

サダ （谷の下方を見て）ハハハ、ズボン脱いで、川あ渡る氣だ。見るま、あの格好！ あんでも、まだやり合つてら！

おりき……（両手を口にかけて下へ向つて）おーい、川あ渡るだら、もつと下へ行きなあーあ！
下へ行きあ、瀬があるだーあ！ お互え同志喧嘩あするの、いゝかげんにせえよー
う！

藤堂……（無言でヂツとそつちを見おろしてゐる）

おりき さあてと！……（ふりかぶつたまさかりを、大木の根元へ。續いて藤堂が、別の木の幹へ向つて叩き込むまさかりの響）こん野郎ツと！ （カーン、カーンと續く響。しばらく切りつゞけてゐる中に、鼻歌が出て来る）山で――

切る木は

かずかずあれど

思ひきる木は

更に無し

のう

更に無い。

（秋の傾陽の中に力一杯まさかりを振る老婆と青年と、姉さまかぶりを取つて上氣した襟元を拭きながら、ニツコリしてそれを眺めてゐる娘）

（昭和二十一年二月稿）

稻葉小僧

(二幕)

時……………現代。夜。

所……………山田外科醫院内部

人……………

戸部文三

稲葉小六

金貝看護婦

本田婦長

山田院長

絹子

友代

小じんまりとした私立醫院の玄関と待合所。下手、ガラスの押扉、それを入ると叩きの土間、一段あがると広い板敷になつて居り、そこに丸卓、椅子、火鉢、壁に寄せて長椅子など。壁に大時計。板敷は廊下になつて正面奥へ薬局・診察室・手術室などに通ずと、手前上手（病室に通ず）に伸びてゐる。薬局には廊下に向つてと、土間に向つて小窓があり、受付をも兼ねる。薬局の戸口の側に電話。天井中央から下がつてゐる唯一つの電燈の圓錐形の光がそれらを照し出してゐる。光の輪の外は、暗くてよく見えす。大時計が重々しい音でユツクリと十二を打つ……

幕開く。

誰も居ない……間。

やがて眞暗な街路から、人影が二つ、ガラス扉へ寄つて来る。

聲

……え、こんばん……ごめんください……ごめんください……え、と、こんばんは……ごめん（言ひながら扉を押して聲の主が半身をのぞける。文三。ツンツルテンの洋服を着

て、動作も言葉つきも恐ろしくユツクリと齒切れの悪い、しかも小学生のやうにきまじめで、ニコリともしない男)……こんばん……ごめんください(キョトリ、キョトリと内部を見まわす)えいと……

別の聲 どうしたんだ?

文三 ……う? うむ、どうもこの……えい、ごめんください……。

別の聲 ちれつてえなあ! ニー・カイカイデ・カイカイデ! (聲の主が、文三を押し入れるやうにして、土間に入つて来る。小六。背廣に烏打帽に革のゲートル。少しそよつかしい位にキビキビとした男で、年は文三より若く、にがみ走つた色白の面上、額口の横に疵あと。あたりを見まわす)……こんばんは。……(返事なし)

文三 寝ちやつたかなあ。

小六 だつてお前、こんだけの病院であつて、まだ十二時を廻つたばかりだつて言ふのに一人残らず寝ちまやあしめえ。

文三 兄きあ、近頃の東京知らねえからだよ。こんで、なんてえ事あ無え、日が暮れて、八九時になりや、どこのうちでも、高いびきだあ。なにしろ――

小六 表口に鍵もかわねえで、ぢや、寝るのも、はやるのか?

文三 それさ、んだから俺も……だけど、病院だからなあ、こんで、いつなんどき……。

小六 (ノロノロした相手の言葉は聞かず受付の方へ寄つて行き、小窓を指先でコツコツ叩く)今晚は。……(返事なし。小窓を開ける)ごめん!

文三 えいと……(小窓から薬局の内を覗く)……誰か居ないかね?

小六 へつ、夜逃げでもしやしないか。……。しかし、下駄あ、こうして有るんだから。

(下駄を蹴つたりしてデレデレして、身を乗出して廊下の奥を覗き込む)

文三 (その間に頭を小窓の中に差しこんでゐる)もしもし。

小六 ……(振返つて押扉に書いてある文字を見る)此處だな、たしかに?

文三 ……なにがよ?

小六 此の病院にまちげえは無えな?

文三 そりやお前、その、隣りの家で、外科で山田と言ふ病院に行つて……ハッキリさう言つたんだから――(同時にガツンと音がして、後頭部を窓枠にぶつつける)おつと! ……(差し入れた頭が小窓から取れなくなつてゐる)ほつ!

小六 どうした？

文三 その、なんだ、戻らねえんだ。この——（窓枠に両手をかけて首を引抜こうとモガモガする）えいと……。

小六 てつ！ なんてまあ——！（文三の後襟を掴んでグイと引く）

文三 て！ てえつ！

小六 （隙間から覗いて）あごを引くんだ、あごを！ あごだよ！（又、引く。ゴリゴリと音がして、やつと文三の頭が抜ける）……馬鹿め！

文三 へえる時あ雑作なくへえつたんだ。……鼻がもげるかと思つた。（突ひもしないで、両手かわるがわる鼻を撫でてゐる）……へえ、おどかさない。

小六 誰もおどかしてなんぞおやしねえ。相變らずだ、ノロ！ ……ところで、全體、こいつ、どうなるんだ？

文三 うむ。……どうなるつて、お前……誰も出て来ねえんだから、どうにも、これ……。

小六 俺あ急ぐんだ。

文三 だつて、お前、よそのうちだもん、まさか踏んごんで叩き起すてえわけにも行くめ

え。……しやう無え、明日でも又出直して来て——

小六 出直してなんぞ来て居れる位なら、今頃こんな場末をウロウロしてやしねえ。

文三 するてえと、なにかね、やつぱし、ぢや——？

小六 するてえと、ぢや、なにかね——その雑音を挟むの、いゝかげんに、かんべんしてくれ。久しぶりで聞くと、足の裏がかゆくなら。

文三 んだからさ、そのう——（相變らず）そいぢや、盤城の方へ行くんだね？

小六 勿論。實あ先程まで迷つてた。山半の親方も當分こつちに居て、若いものタバネをしてくれと言つてくれるしなあ、どつちにしやうと迷つてゐたが、こうしてお絹が見つかつたとなりや、ウンもスウも無え、あいつと一緒に盤城へ行つて、スツ堅氣で稼ぐんだ。

文三 さうか。しかし、それにしたつて、なにも、そんなに急がなくなつてお前——

小六 細田の兄き達が上野の宿で、俺らの行くのを待つてるんだ。

文三 そ、上海から一緒の人達だろ？ しかし、なんぢやないか、何も、ハッキリ約束したわけや無えんだろ？ なにも、さう——

小六 そりや、こつちの腹が決つて無かつたから、約束はしねえ。だけど、明日の晝迄待つてゐるから、それまでに來なかつたら、俺達だけで出發する——さう言ふ事になつてゐるんだ。

文三 だけんど、炭坑なぞに今頃から行つたつて、この、なんだ、どうせ荒い仕事だらう、働けるかねえ、兄きの前だけんど？

小六 なあに、昔取つたキネヅカだ。十代から五六年、東京で山半の親方んとこの飯を食ふまで、稼いだとこだ。言はゞ古巣だもん、ヘイチヤラだい。

文三 兄きや、いゝかも知れんけど、俺なんざお前、もともとテキヤ稼業で、身體あ、なまつちやつてら。

小六 なあに、少し馴れりや大丈夫だ。病人でさえ無きや、誰にだつてやれら。

文三 さうかねえ。……んだけど、この——東京に居るやうにしたら、どんなもんかねえ？ 山半でお前、若いもん頭で、顔は利かあ。稲葉の兄さん兄さんで、悪かえ無え。俺らも、さうなりや、その下で、チツたあ面白い渡世もやらして貰へら。

小六 まつびらだ。こんな風になつちまつたのに、顔役だの何だのと言つてゴロつてゐる時

世では無からうぢやねえか。第一、東京々々と言つたつて、どこに東京が有るんだ？ モロにお前、ぶつこわれてしまつてるぢやないか。へ！ 俺ら、五六日前、初めて山手線で一廻りして見て、びつくらしたのなんのつて、それこそ、影も形も、昔の東京のトの字も残つて無え！ 話ちやサンザ聞いてゐたが、まさかこれ程たあ思はねえやな。いまだに俺にあ正の事たあ思へねえ。

文三 そりや、まあ、さうだらうなあ。

小六 よんべなざあ、銀座裏あ通つてゐて、昔の事思ひ出して俺ら涙が出たぜ。

文三 そらあ、昔、あの邊で鳴らした兄きにして見りや、なんだ、無理あ無えとも、うむ。

小六 なに、町々家の事ぢや無えよ。そんなもなあ、その内又こしらへりやいゝさ。俺の言ふなあ、人間だ。東京の人間の、つまり、イキだ。どいつも此奴も、ひだるそうな青い顔して、キヨロキヨロと下あ向いて、そいでもつて、薄つ暗い所で、コソコソと商賣してやがる。負けて、乞食になつちやつたならなつちやつたでいゝから、思ひ切りよくサツバリと諦めて、正々堂々と首い持上げて歩いてよ、なんでもいゝから働いたらどうだ。ポロウ下げて、こえくみしたつて、お前、なんの耻かしい事があるんだ。

へ！ 東京の人間も下落したよ。

文三 だつて兄き、そんな、そんな事言つたつて、兄きあ上海から戻つて来て、こんでまだ五六日にしきやならねえ。東京の人間がどうのこうのと言つたつて、いつ、お前、見てる暇があつたい？ そらあ、まあ、イキやハリが無くなつたなあ事實だけんど、それもお前、こんだけの目に逢つた後だ……なんだ、つまり深い淵にや波立たすと云つてな、大きにこんで、ジツクリと腹あ据えてるから、シンとしてゐると言ふ事もあらあ。第一、この、俺達東京つ子にや、こんな風になつちやつた東京を復興する、この、責任だな、つまり責任が有らうぢやねえか。山半の親方なぞも、つまり、それを言ふんだ。んだから——

小六 そら、さうだ。しかし復興は東京に限つた事あ無え。いや、東京にしてからが、物が無くつちや復興出来めえ。すると先づ俺達に直ぐやれるのは石炭だ。俺が盤城に行こうてえのは、それだ。

文三 へへ、なに、そんな事よりも、へへ、お絹さんだらう？

小六 そりやまあ、なんだ、有りやうは、そのへんかな、フフ。なんしろ、又東京で遊びに

文三 来年三月高尾が来るか。とんだ、稲葉の兄きも焼きあ廻つた。

小六 あゝ廻つたよ。

文三 俺らあ、詰らねえや。盤城へ行つても、長屋の隅かなんかで、お仲の良いのを指をくわえて眺めてゐるんだ。

小六 お前は、ぢや、一緒に行くの、よすか？ いや、まじめな話がよ、先刻からなんだか気が進まねえやうぢやねえか。

文三 そんな、そんなお前、殺生な事言ふなよ。行くよ、つれてつてくれよ。たゞ話がさ、この、話をしてるまでぢやねえか。

小六 ハハ、ま、いゝや——(あらためて、その邊を見まわして)ところで、この病院は……こ

文三……(これもキョトキョト見まわす)えゝと——しかし——んだからさ、どうで此處で働いてゐると言ふんなら、急に居なくなりやしねえんだから。

小六 わからねえなあ！ いつときも早く俺あ逢ひてえんだテキに。……どんな氣持で俺が

戻つて来たか、察してくれ。

文三 だつて、出て来ねえもなあ、渡りの付けやうは無えんだから、どうも、これ……。

小六 失禮して、俺あ、あがるよ。(靴をぬいで板の間にあがる)

文三 ンだけど、ことわりも無しに、いゝかなあ?

小六 別に悪い事をしやうと言ふんぢや無えんだ。それに病院と言やあ、言はゞ、まあ、誰が飛び込んでもいゝ所だ。……(正面奥の廊下や手前上手の廊下の方などをすかして見ながら)今晚は! ごめん! どなたか居ないかね? ……へつ、どなたも居らつしやらねえと来た。(手に持つてゐた帽子を丸卓の上にポイと投げ出して)こうなりや持久戦だ。(長椅子にかけやうとしてヒョイと見ると、文三が板の間の真中にキョトリと突立つてゐる)お前も、かけたらどうだ?

文三 うむ、その……

小六 今戸焼の狸が酒買ひに出て戸惑ひをしやあしめえし……(全く、文三が戦闘帽を片手にダラリとさげて立つた姿は、それにいくらか似てゐる)

文三 だつて、兄き、俺あどうも、この……

小六 ……(自分の言葉で何かを思ひ出して、改ため、相手をチロチロ見てゐたが)さうだ久しぶりだ、其處で一つ、人寄せのタンカぶつばなして見てくれ。

文三 ……なんだよ?

小六 これからバイを始めやうと言ふ時あ、お前いつも、そのデンで町の角やなんかで突立つてゐたよ。ハハ。やつて聞かしてくれ。そしたら、誰か出てうせるかも知れねえ。

文三 ……そんな、お前……今更……商賣よしてから五年………忘れたよ、いゝかげん……その、第一、こんな所で、よる夜中だつてえのに——

小六 いゝぢやねえか。案内を乞ふても誰も出て来ねえから、人寄せをしやうと言ふんだ。頼むからやつて見てくれ。

文三 ……だつてお前、おらあ、きまりが悪いや。

小六 だから、聞いてゐるなあ俺一人だ。誰か出て来たら、よしやあいゝ。

文三 だつて、そんなお前、殺生な——

小六 いやか? ……さうか、ぢや、頼まねえ。

文三 いやつてえわけぢや無えけんどさ——

小六 ぢや、聞かせてくれ。久しぶりに戻つて来たんだ、昔の東京の匂ひぐれえ、かゞしてくれ。

文三 さうかい……んぢやまあ……えゝと……（頭を掻いたりして考へてゐたが、やがて、自分の周囲の板の間のあちこちをマチリマチリと見守る）……弱つたなあ……どうも、その……（持つてゐる帽子をヒョイと板の間に置き、二三歩がつて、その帽子をチツと見てゐたが、想像上の通行人の足が帽子を踏みそうになるのをハラハラして警告するしぐさ）……あぶないよ！ おつと、あぶない！ 喰ひつくよ、氣を付けねえと！ とつとつとつと！（例のノロノロした態度と言葉で、どこが變つたとも見えないが、いつべんにその帽子に注意を集中させてしまふ）

小六 ……うめえや！（ニヤニヤしてゐる）

文三 ……（通行人が三四人立ち停つたらしい。それらの顔を見まわして）へ、へ、へ……帽子に見えるでしょ？ ……たしかに、へ、へ、くたびれた戦闘帽だ。……ところうが、實は左に非ず、これが、生きてゐる。ノソリノソリと、ねえお立ち合ひ、おどろくなかれ四六の慕！（調子に乗つて、出しぬけに大聲を張りあげる）

（正面廊下の奥から看護婦の金貝——まだ極く若い、白衣に白帽、兩腕を腋までまくり上げ、白マスク——が小走りに出て來、藥局の扉の把手に手をかける）

文三 今に動き出すよ！

金貝 （その聲でヒョイと其方を見て、立停る）……？

文三 ね？ そうら出て來た。

金貝 （めんくらつてゐる）……あのう……？

文三 ほら、ほら、ほら、動き出した！（まだやつてゐる。小六は金貝の姿を見て椅子から立ち上つてゐる）

金貝 え？ ……なんですか？（小六を見る）

小六 えゝ、今晚は。あのう……

金貝 なにか……？（その眼を、氣になると見えて床の上の帽子に移す）

文三 ……うごき……（言ひかけて、夢からさめたやうになり）……なにさ……動きやしねえ。（帽子をヒョイと取つて、頭にのせてケロリとしてゐる）

小六 （代りにてれながら、一二歩前へ出て）へ、へ、その、チヨット……

金貝 急患ですか？

小六 キューカン？

金貝 いえ、けがでもなすつたんですの？

小六 いえ、そんな——こちらに来てゐる者を訪ねて——

金貝 あゝ、お見舞ひなんですわね。チョット待つて下さい。今、急ぎますから——そちらで。(言ひ捨て、薬局に入る)

小六 いえ見舞ひぢや無えんで。チョットその——(薬局の扉が締められたので、しかたなく、その扉を見てゐる)

文三 ……どうも、この、おどろいたよ。

小六 しかし、なんだなあ、うめえもんだなあ相變らず。どこを押しや、そんな藝當が出て來るんだ？

文三 なにさ、へへ、いくらおだてたつて、もう、やらねえ。

小六 だからさ、チャンと利きめが有つたんだから——(言葉の切れぬ内に、薬局の扉を押開けて、繒帯の包みと二三の薬品瓶を手に抱えた金貝が出て來て、正面奥の廊下の方へ小走りに行く)

うとする) おつと！。(へとそれを押しとゞめるやうにして) 待つておくんない。手間あ取らせません。こちらに、その、絹子つて言ふ者が來てる筈なんですわ、チョットそれに——

金貝 絹子？ さうですねえ、絹子さんなんて方、入院なすつて居なかつたやうですけど……

……後で、あの、名簿を調べて——

小六 いえ、その、看護婦なんで……看護婦さんの中に——

金貝 はあ？

小六 看護婦さんぢや無くつても——とにかく、こちらにつとめてゐる人の中に——

金貝 私達三人と、それから炊事に一人居ますけど、絹子なんて人は居ません。

小六 ……本郷といふ苗字ですけどねえ？

金貝 本郷？ ……さあ、本田さんなら居ますけど……でも、本田さんは静江と言ふ名です。

小六 さいですか。……(考へてゐたが、急に眼を輝かして) それそれ！ それです！ 静江とも言ふんです、言つてた事がある！ そ、その女に、いや、その人に言つてくれま

せんか、小六が逢ひに来てゐるつて——稻葉と言つてもわかりません。

金貝 はあ、……でも今チヨット手が離せませんから、しばらく待つてゐて下さい。イナバ
さんですわね？

小六 (うなづいて) 小六です。さう言つて下さりや、わかりますから。

聲 (正面廊下の奥から) 金貝さん！ どうしたの金貝さん！

金貝 はあい！ (その方へ小走りに去る)

小六 ……(それを見送つてから) ありがてえ、やつと、とつつかまへたぞ！

文三 ……んだけど、静江なんて名が有つたかねえ、お絹さんに？

小六 あつたんだ。彼奴が、六丁目裏の鶏料理に出てゐた頃だ。そのさ、先刻言つた、堅氣
になりてえてんで、看護婦の學校などに通つてた時分よ。店ぢや静江と言つてゐた。

文三 さうかなあ。……だけど、兄きの前だけど、鶏料理と病院たあ違ふんだしなあ、な
にもお前、源氏名あ名乗らなくなつて——

小六 源氏名だつて言やあがる、てつ！ (嬉しさにその邊を歩き廻る) ハハ、ありがてえ！
こんだこそ、俺あシヤンとして、なんだ、彼奴にも、いゝ目の一つも見せてやる。耻

かしい話だが、これまで着物一枚帯一筋、引張らした事が無え。

文三 ……んだけど、なんせ、とにかく、六年てえ月日がたつてゐるんだから——

小六 だからよ、彼奴だつてそれこそお前——(悦に入つてゐる) なんしろあんなことで、七
年前、銀座邊の盛り場あ火が消へたやうになるし、仲小路の小僧とはうるせえ出入り
にやなる、どうにも世間を狭くしちやつて上海へ飛んで以來、たより一本出さねえ始
末だ。今度一緒になつたら、ちつたあ、いたわつてやらねえぢや、彼奴があんまり可
哀そうだ。

文三 違ふんだよ、俺の言つてゐるなあ……その……

小六 何が違ふ？

文三 とにかく、六七年てえ月日だもん。……その……まあ……女だもんなあ。……それが
ソツクリ元のまんまで今迄暮してゐるか……

小六 なんだ、さうか。ハハハ、だから、こうして看護婦になつちやつてらあ。ハハ。

文三 うむ……いやさ……そりや、一人でやつて來たとしてもだよ、かんじんのお絹さんの
腹ん中が……

小六 わかつたわかつた。ハハハハ、お絹つて奴あ、そんな女ぢや無えよ。よしんば、六年が十年別れておやうが……ハハハ、逢ひせえすりや、お前……ハハ、そこいらの事お前にやわからねえ、すまねえけど——（その邊を歩き廻つてゐたのが、フツと言葉を切つて、正面廊下の奥から急ぎ足に出て来た人に眼をやつて立停る。出て来たのは本 婦長。男のやうな言語動作の中年の女で、白衣白帽白マスクに、兩腕を肩の邊までまくり上げてゐる。氣の立つた顔付きと眼光）

婦長 （小六の方をチロリと見たまゝ、薬局の入口のそばの電話口にかゝり、受話器をはづして廻轉盤を廻す）

小六 ……（相手の横顔を覗き入るやうに遠視する。文三も椅子を立つて来る）……あのう？

婦長 ……（右手でマスクをかなぐり取つて二人をチロチロ見る）

小六 ……（チョットびつくして）え……その——？

婦長 待つた！（マスクを持った手をつねて）……あゝもしもし。共生會ですわね？ こちらは山田外科です。山田。……先月の末に、そら、學生の一人よこして貰つた……さう。……もしもし……さうさう、山田外科醫院。しつかり聞いて下さい。寝呆け

ちや困るよ！

小六 ……（おどろいて立つてゐる）

文三

婦長 ……アッハハ（男の様に短かく笑つて）もちろん！ 用が無きや、誰が電話なんか掛けるもんですか。あのねえ、ベ—型の給血者を……ベ—、ベ—型。わかつた？ ア—ベ—のベ—！ さう、それを一人、間に合はせて貰へる？ ……相手は小兒患者だから、一人で結構。いえ、まだ、ホンのたつた今、開腹すましたばかりで、いよいよ、するかしらないか、まだきまらないけど、もしかすると三十分位の内に、急にやる事になるかも知れないから、前以てチョット聞いとこうと思つてね。いづれ決定したら又電話しますけど、念のため……はい。どうぞ早いところ！（電話の相手が向ふで何か調べるらしい。その切れ目を、電話口に掌でふたをして、此方を振向くやいなり）あなた方、ど

なた？

小六 （へんくらつて）あの、チョットその……先程の看護婦さんに申ししたんですが——
婦長 どなたですか？

小六——こちらの、お絹——その、静江と言ふ者に、取次いで下すつて——
婦長 ですから——（そこへ電話の相手が再び話し出したらしい）あゝもしもし。……え？

え？ なんですか？ ……もつとハツキリ！ 簡単明瞭に！ ……なあに金グズグズ
あんた言つてんの？ 間に合ふか合はないか、それをハツキリ言つてくれりやいゝの
よ！ さうですよ、馬鹿だねえ！ 簡単々々！ ……都合が悪い！ 都合が悪いとは？
……今丁度、間に合ふ人が居ない？ ……ちや駄目ね？

（そのチョット前から正面廊下奥に現はれた白い人影がユツクリ此方へ歩いて来る。山田院長。
まだ若く、落着い、物言ひのブツキラポーな醫師。手術衣姿。両手には、まだゴムの手術手袋
をはめたまゝ）

院長 （立停つて、婦長の電話を聞いてゐたが）……駄目かね？

婦長 はあ、なんですか、直ぐには間に合はないと言ふんですの。

院長 どうも、そんな事ぢや、しやうが無いなあ。……だが、まあいゝだらう。

婦長 さうですか？ ……（電話口へ）もしもし、そいぢや、ま、……だけど、そんな事ぢや、
しやうが無いわね。お願いだから、もつとシツカリやつて下さいつて上の人に言つと

いて下さいよ。ホントに、なんのための——（言ひつゝのらうとするが院長が傍に立つてゐる
ので、思ひとゞまり）ぢや、さようなら、失禮。（電話を切る）……なんでしたら、母親
から、なにすることに——？

院長 しかし、相當貧血してゐるしね、立會つてゐて卒倒するやうな状態では、無理だら
う。……寝せてあるかね？

婦長 はあ、三號室の方に。おさまつたやうです、だいぶ。

院長 今、立會つてゐる、あの娘さんのは？

婦長 エー型だそうで、駄目です。

院長 さうか。……なに、いよいよとなつたら、折口のでやる。近所から連れて來てもいゝ
しね。町會の裏帳はチャンとしてゐるね？

婦長 はあ。しかし、それだと、今から準備して置きませんか——

院長 タバコ一本くれ。（婦長はポケットからタバコの箱とマッチを取り出す）……なに、やらな
いで済むかも知れん。おつと——（婦長の差し出したタバコを、思はず左手を出して取りそ
うになり、氣が附いて宙で止める。その左手の手術手袋の甲の半分ばかりが、ベツトリと血で濡

れてゐるのが、はじめて見える。それを認めて此方の小六がドッキリする。文三も首を差しのべてそれを見てゐる。……婦長は馴れた手附きでタバコを院長の口にくわえさせてやる。婦長は院長に對する時だけは、ひどくやさしい。

婦長 いえ……進んでゐるんで、びつくりしました。切開しなくても、どうせ、あんなイレウスを起してゐたんぢや——（マッチをすつてやる）

院長 うん、中毒がひどい。急に始まつたもんぢや無くて、だいぶ前から來てゐるね。とにかくあんな小さい子にトルジオンは珍らしい。……（タバコをユツクリと吸つて）……あゝ、うまい。

婦長 一時間半、ぶつつかけてすものね。こら、この汗。（ガーゼを出して院長の額の邊を拭いてやる）……どうでせう、先生？

院長 仕事はうまく行つた。……しかし、なんせ、子供だからね。……（タバコの煙を吐きながら）……最善を盡す。（單純に言つて、元來た方へ引返すべく身を返して、小六と文三を見て）……この方たちは——？

小六 こんばんは……どうも——

婦長 面會の人です。

院長 さう……（廊下奥へ歩き出したが）イルリガートル、もう一つ、それからオブエクト・グラスを二三枚、用意しといて。

婦長 はあ。（院長は落着いた歩調で奥へ去る。婦長、チョットそれを見送つてから、サツサと薬局に消える）

（それまで小六と文三は、氣を吞まれてマチリマチリとしてゐたが、今度は院長も婦長もスツと居なくなつたので、ボンヤリする）

小六 ……おどろいたなあ。

文三 取り込んでるやうだなあ……けがにんかねえ？

小六 開腹と言つてたから、腹を切つて手術したらしいな。……しかたが無え、もう少し待つか。とんだところに飛込んで來たもんだ。

文三 しょんべんが出たくなつたがなあ。

小六 ばか野郎。

文三 ンだけれど、これ、しやうが無えぢやねえか。（キョトリと立つて、上手奥の方などを、す

かして見る)

婦長 ……(一二の薬品包みとイリリガートルを持って薬局からサツと出て来る)

小六 (あわて、近寄つて) ああ、お忙しい所を甚だ相済みませんが、その——静江……と言ふ人に、こうして來てるからと、おつしやつといて下さらねえでせうか。待つなあ、いつまででも待つてゐますから。

婦長 (喘みつくやうに) ですから、何の用ですつて言つてるぢやありませんかつ!

小六 いえ、そりや、逢つた上で——

婦長 ですから、こうして逢つてるぢやありませんか! 私が静江です。本田静江。私のほかに静江と言ふのは、この病院には居ませんよ!

小六 へつ? ……。

文三 ……(これも、びつくりして、眼をむいて相手を見、むたが、ニタニタ笑ひ出す) ……へへ、ぢよ、ぢようだん言つちや……いくらなんでも、お前さん……山の芋が鰻になると言ふ話あ有るが、そんな——

婦長 山の芋?

文三 いえ、その、なんです……私は——

婦長 私に面會があると云ふから來て見ると——なんです?

小六 いえ、こりや、何かの——

婦長 用が有るならサツサと言つて下さい!

文三 ……便所、どこでせうか?

婦長 なにつ?

文三 いえ、その、べん……

婦長 便所は——(と頭で上手への廊下を指して) そちらの、右。(言ひ放つて、舌打ちをしながら正面廊下へ。そこへ廊下奥から和服を着た若い友代が、心配そうな緊張した顔をして小走りに出て來て、婦長に出會ふ)

友代 あもう——?

婦長 ……?

友代 どうなんでせうか?

文三 (小六を見て) どうも、おつたまげたよ。(小六も毒氣を抜かれて椅子に腰をおろして、ハミ

ケチで額を拭いてゐる)

婦長 ……あなた立合つてごらんになつてゐた通り、手術はすみしました。

友代 はい、いえ……どうもいろいろありがたうございました。あの……

文三 とんだ静江だあ(婦長と友代に眼をやる)

小六 ウム、どうも——

婦長 ……(チロリと文三の方を振り返る。文三ビクツとして、ヒョコヒョコと歩いて上手廊下の方へ消える)

友代 それで、なんでせうか……どうなんでせう?

婦長 どうとは、なんです?

友代 いえ、あの……助かるでせうか?

婦長 ……手術はうまく行きました。

友代 でも、あんなにグツタリとなつてしまつて……あれつきりで眼がさめないで、おしまひになるやうな事は——?

(こちらの椅子にかけた小六は、額を拭きながら、時々二人の方へ眼をやつてゐる。はじめボン

ヤリ見てゐたのが、チラチラのぞく友代の姿に次第に氣をとられ、注意を集める)

婦長 ……まだ子供さんですしね、それにズツと前から、いけなかつたやうです。……でも、まあ、あのまゝで置いとけば、どつちせ、駄目だつたんですからね。

友代 なんとかして……お願いでございます……どうぞ、ひとつ——

婦長 あとは、心臓がもつか、どうかできまります。(奥へ歩き出す)

友代 なんとかして……どうぞ……

(婦長と入れ代つたために、友代の顔と全身が見える。その友代を穴のあくほど見てゐた小六が、出しぬけにサツと椅子を立つ)

婦長 とにかく、出来るだけの事は盡して見ます。

友代 よろしく、お願いいたします。どうか——

婦長 いえ、あなたは、いつとき、立合つて下さらなくても結構だから、この間に、お母さんの方を見てあげて下さい。(言ひ捨て、奥へ消える)

友代 はい。……(婦長の消えた方を心配そうに見送つてゐる。その後姿を見守つてゐる小六が次第にワクワクして来る。……友代は、やが、振り返つて、上手廊下の方へ。椅子のところ人が立

つてゐるのをチラリと眼に入れ、手に持ったハンケチで口のあたりを隠すやうにしながら、小腰をかきめて、急ぎ足に横切りかける)

小六 ……お……お絹!

友代 ……(驚ろいて立寄り、そちらを見る) ……?

小六 俺だ俺だ、小六だよ。久しぶりだったなあ。ハハハ……なにね、おめえんちをヤツト捜し出したら、誰も居ねえだらう、困つちまつて隣りの家に聞きに行かせたら、隣りの家でも、もう寝ちやつてゐて、なかなか起きないのを、ようよう叩き起すと、戸も開けてくれねえで、此處に来てると言ふんだ。それでヒヨイと思ひ出した、おめえが前に看護婦の勉強してゐたことがあつたな、それさ! そんな、まあ、テツキリ看護婦になつてゐると思ひ込んぢまつた。おかげで、さつきから随分マゴマゴしたぜえ。ハハハ、いくら訊ねてもわからねえ筈よ。(一氣に喋りながら友代の方へ寄つて行く)

友代 ……(後しざりしながら)あの……どなた……?

小六 (逢ひたい人にやつと逢へた喜びに相手の言ふことも耳に入れない)いや、捜したのなんのつて! 向ふから歸つて來てから、こつち——ホンのこないだ上海から歸つて來たん

だ。なにさ、歸つて來たから比處にこうして居るわけだが——ハツハハハ(と一人で笑つて)とにかく、丁度いゝあんべえにノロ文と逢つたんで——そら、おめえも二三度逢つたことがある、テキヤをやつてゐた、そら、おつそろしくノロノロした、まるで油とつくりみてえな——あれだ。(その當の文三は小便をしをへて、上手廊下の方から戻つて來て、上手にノツソリ立つたまゝ、此の場の様子を見てゐる)やつこさんを案内役にして、巢鴨から寺島、第六天から澁谷と、次ぎから次ぎと間合はせちや、まるで足あすりこぎさ。でもまあ、これでやれやれだ。……俺あな、——どうも、何から話したらいいかわからねえが……とにかく、かんべんしてくれ。永えこと放りばなしにして、苦勞かけてすまなかつた。なに、はじめ向ふへ渡る時あ、こんな、おめえ、六年も七年も留守にしようなんて、夢にも考へてやしねえ。たかだか半年か一年……その氣だつた。だもんだから、手紙も出さねえ。なに、もう直ぐだ、もう直ぐだ、歸りさえすりや……そのつもりでツイ、もう三月、もう半年と延びちやつて……もつとも、頼つて行つた細田の兄きが、向ふで請負をはじめてゐて、俺もまあそいつを手傳つてゐたが仕事に忙がしいもんだから、どうしても離さねえ。そこい、三年前から、こんだ歸り

たくも歸れなくなる。ついなあ。……だけど、六年が間、俺あ……なんだ……お前の事を思ひ出さねえ日は無え。フツ！（自嘲）中學生ぢやあるめえし、胸つくその悪い話だが、晝間あ忘れてゐると思つてゐるやつが、夜になると、つい、おめえ……。そこの戦争はあの始末だ。テンヤワンの騒ぎさ、あつちも。すると、東京も大變だらうと思ふ。どうしてるか？ そこいやつとまあ船に乗れる事になつて、細田の兄き達と一緒に歸つて来た。いや、内地の山が見えだしたら、みんなもう泣いたよ。俺らにして見りや、ほかあどうでもいゝ、たゞもう東京だ。……そんなわけだ。かんべんしろ。

友代

……（その間も困りきつて、何か言はうとあせつてゐるが、相手があまり氣をこめて一氣に喋りつゞけるので、氣を吞まれて口出しをする隙は無し、わけはわからず、少し氣味が悪くなつて来て、モチモチと、しまひに奥を振返つたり、上手廊下を見たり、そこに立つてゐる文三に助けを求めらるやうな眼をやつたり）……ちがひます。あのう、そんな……ちがひます。

小六

（相手をさうだと思ひ込んでゐるので、自分だけでスツカリ内省的になつてしまつて、床を見詰めて、思ひ入つたやうに語りつゞける）いや、さうなんだ。しかし……しかし、これから

あ、もうお前に、つまらねえ苦勞はかけやしねえ。……昔あ、しやうが無かつた。つまらねえ、俠客氣取りで、思ひ出してもムシズが走らあ。……上海へ渡つてから、一人になつて、シミジミ考へて見た。それまでの自分のして来た事よ。……なんてまあ、出来そくないの、薄つべらな……つまり小僧つこ……つまりが稲葉小僧だ。そいつが身にシミジミとわかつた。うむ。……お前に對してのこれまでのやりかた……さうだ。お前をシンから想つてゐる氣でゐて……いや、シンから惚れてゐるくせに、これまで現に俺がお前にして来た事と言へば、お前に苦勞をかけ、お前をいぢめる事ばかりだつた。上海へ立つ時だつて、さうよ。俺が留守の間もチャンとお前の身が立つやうに、なんとか格好をつけて行かさならねえとを、ウヌが一人合點で行つちまつた。そりや、當時身體ヤバいし、急いぢや居たけど、その氣が有りや、それ位の事あ出来てる。……向ふに居る間中、腹ん中でお前にあやまり通しさ。ハハ、……そんなこんな、いろいろ考へてな、量見方あ、だいぶ變つた。

文三

……兄き。おい、稲葉の兄き！

小六

黙つてろお前は！ そいでさ……そこい、一週間前に戻つて来て、この東京の姿を一

目見るなり、こんだこそ、お前、ドカーンと、それこそ脳天から、やられた。それこそシチリコツパイ、これまでの自分一人のケチツクセエ量見かたから、夢もまぼろしも消し飛んだ……なんしろ、今後どうしていか、まるつきり、わけがわからなくなつた。……それで、お前の事だ。とにかくにも、お前に逢つて、とにかくまあ、安心もさせ、お前の考へも聞いて、何もかもチャンとしてな、そんで、まあ、これからお前と一緒に、なんだ、堅氣に働きてえ……さう思つてよ——

文三 兄き！ あのう、この人は——

小六 てめえは引込んでるい！ まあ、お絹——

友代 それは、あの……言つて見ますから……いえ……あの……（小六の遠望の間に、何事かに氣附い、言葉を挟まうとするが、どう言つてよいかわからぬし、味は悪くなつてゐるし、それに一方には氣がせくので、遂に、頭を一つ下げると、小走りに文三の傍をすり抜けて、上手廊下の方へ消える）

小六 お絹！ おい！ おい、お絹！

文三 （追ひかけて行こうとする小六を止めて）兄き、なんだか、どうも、變ぢや無いかねえ？

どうも、こいつは——

小六 何が變だ？

文三 なんだか、違ふんぢやないかなあ。

小六 何が違ふんだ？

文三 今の、その——

小六 だから、何がどうしたつてんだ？

文三 なんだからさ、人違ひぢやねえかね？

小六 なあに、何か譯が有るんだ。何かキツト譯があつて——

文三 さうぢや無えんだよ。そのう、なんだ！ 今のは、お絹さんぢや無えんぢやねえかねえ？

小六 なんだつて？

文三 なんだか變だよ。

小六 な、な、なによ言つてゐるんだ。寝呆けるなあ早えぞ。お絹ぢやねえか現に。

文三 うむ、そらあ、お絹さんにソツクリだけんど……どうも、この、あんまりソツクリす

ぎらあ。

小六 チッ！ お前どうにかしやあしねえか？ 顔だけちや無え、聲もチャンとお前聞いたらう？

文三 うん、たしかにお絹さんの聲だけんど……だけんど、なんだぜ、つまり六年だぜ。つまり、あれから六年たつてゐるんだよ。その、赤んぼだつて六年たちや六つにならあ。あん頃、たしかお絹さん廿一か二だ。するてえと、今年、廿六七だあ。……今の女は、せいぜい十九か廿だ。兄きの前だけど、人間、さかさに年を取りやしめえ……實あ俺もはじめお絹さんだとばかり思つてゐたが……よく似ておれば似てるだけ、こいつ、變だよ。

小六 ……（文三が喋つてゐる間に、その事に氣付き、ギツクリ顔色を變へ眼を据えて空を見てゐたが）……するてえと——（友代の去つた方を睨んでゐる）

文三 たとえにも言はあ、子供の大きくなるなあわかるが、ウメが年を取るなあ覺えねえ。兄きだつて俺だつて、あの頃からあ、六つとつ年食つてらあ。あんまり似てるんで、俺らまでさう思つてしまつたけど、お絹さんだけが元のまゝで居るわけが無えも

んな。

小六 ウーム。……（唸つてゐたが、ツイと友代の後を追つて行きかける）

（そこへ正面廊下から金貝看護婦が急いで出て来て、薬局の扉を引開ける。その音で振返つた小六、急いでそつちへ寄つて行く）

小六 チョイ、チョイトお訊ねしますが——（扉の把手を掴んだまゝ振返つた金貝に）今さつき、此處を通つて向ふへ行つた女の方が居ますが——着物を着た、若い——

金貝 はあ？

小六 あれ、誰なんでせうか？ どう言ふ——？

金貝 今、手術をしてゐる子供さんのお母さんの、たしか妹さんだとか言つてゐましたけど……お知り合ひちや無いんですか？

小六 へ？ するてえと、その、お母さんと言ふのは？

金貝 あゝ、それは先刻、手術に立ち合つてゐる最中に腦貧血を起して、三號室に寝せてあります。（言ひ残して薬局に消える）

文三 ……さうだあ！ （手を打つて大聲を出す）

小六 ……………?

文三 お絹さんの妹ぢや無えか、今のは？ たしかあの頃、十四五になる妹が居たぢや無えか。そらよ、一度兄きが巢鴨のお絹さんちへ俺を連れてつてくれた事があらあ。あんな時に、たしか——

小六 さうか……しかし、するてえと……その腦貧血を起して寝てゐるといふのが、ぢや、お絹か？

文三 さうだよ、たしかにさうだよ。

小六 するてえと、しかし、手術をしてゐる子供の母親がお絹と言ふ事になるぜ？ そ、そんな筈は無え！ お絹に子供が有るなんて、そんな——

文三 そりやお前……んだから……

小六 子供なんてえもなあ、一人で出来るか？

文三 そりやお前、子供なんてもなあ、一人で——出来ねえな。

小六 見ろ、子供が有りや、亭主が有ると言ふ事になるんだ。

文三 先づ、さう言ふ事になる。

小六 なによつ！ (いきなり、文三の頭をこづく)

文三 だつてお前……だつて……んだからさ、六年相經ち申し——

小六 まだ言ふか！ ——(そこへ金貝が薬品の箱を抱えて薬局から出て来て、廊下奥へ行きかける。小六、それに向つてすがり附くやうに) そいで、その、貧血で寝てゐると言ふ女の人、本郷と言ふんでせうか？

金貝 さあ、よく憶えておませんが……本郷なんて苗字ではありませんでしたよ。たしか、み、なんとか……さうさう、御厨さんと言つておました。

小六 御厨……？

金貝 急ぎますから——(すりぬけて廊下奥へ去る)

小六 見ろ、まるつきり違わあ。

文三 うむ……えいと……だけれど、子供が有つて亭主が出来てるとすりや、こんで、苗字なども變つて——

小六 ぢや念のために、當の本人に逢つて來やうぢやねえか。三號室だと言つてゐた——
(はや、上手廊下の方へ歩き出してゐる)

文三 だつて兄き、そんなお前、寝てると言ふんだから、そこい——（止めにかゝる）

小六 なあに、逢つて見りや、いつべんにわかる——（言ひながら、廊下の方へ消えやうとしたのが、奥から出て来る人に氣附いてフツと立寄り、その方を見る。やがて妙な顔になつて、後ろへさがる。……廊下奥から、友代に助けられながら、ヨロヨロして絹子が出て来る。小六と文三が友代を絹子と見まちがへた位だから、友代ソツクリの女が出て来るかと思つてゐると、さうでは無く、昔は知らず現在は、面差しはどこやらが僅かに友代に似てゐると言へる程度で、心勞と病弱のためにやつれ果てゐる。友代の肩につかまつた手がブルブルと顫えてゐる）

友代 大丈夫、姉さん？

小六 ……（さすがに一目で絹子を認めるが、そのあまりの變りやうにトムネを突かれて、聲をかけるのも忘れてゐる）

友代 大丈夫？ 歩ける？

絹子 いゝの……（小六を認めるや、口の中でア——と言つて立停る）

（永い間。大時計の秒刻の音。……見守り合つてゐる小六と絹子。先程友代をつかまへて一気に喋り立てた小六の調子では、當の絹子に逢つたらどんなに雄辯にまくし立てることかと思はれた

のが、反對に、なにも言へないで、たゞシミジミと變り果てた女の様子を見つめてゐるだけ。……

……文三も友代も、二人の様子を交る交る見守つて立つてゐる）

小六 ……（口の中で）……お絹。

絹子 ……（次第にうつ向く）

文三 ……だけんど、この、變つたねえ、お絹さん。（棒のやうに突立つたまゝ、眼がしらに流れ出して來た涙を指の先きで拭く）……だいな、なんだ、苦勞したやうだなあ。

小六 ……（文三に言はれるまでも無く、相手の様子から殆んど一切のことが一度にわかるだけに、却つていたわりの言葉も言へず、涙一つ出て來ない。次第に頭が垂れて來る）

絹子 ……（眼まひがするらしく、フラフラと倒れそらになる）

友代 姉さん！（椅子の方へ連れて行く）姉さん！

絹子 ……いゝのよ。（椅子にかける）

（間……）

文三 ……稻葉の兄きが、どうしても、お前さんを捜したいからと言ふんでね、俺も、その……俺あ、その、なんだ、文三ですよ。ノロ文だあ、當時……ハハ、一三度お目にか

かつた事があらあ、ハツハハハ（笑ふがチツトもおかしそうでは無い、小六も絹子もそんな聲は耳に入らぬらしい。友代は姉の様子を心配そうに見たり小六の方へ眼をやつたりしてゐる）

小六 ……（やつと頭を上げ、口の中が乾いてしまつたやうな、かすれた聲で）……弱つてゐるやうだ。……それに、こんな所だし、なんにも言はない。……俺が悪いんだ。……言ひてゑ事は。いくらでも有るが……言はない。……とにかく、大事にしてくれ。

絹子 ……（聲を立てないで、せぐり上げてゐる）

文三 全くなあ……どうも……（頬に涙を指の先でのたくつてゐる）

小六 ……しかし、たつた一つ、聞かしてくれ。……その、今、手術を受けてゐる子供と言ふのは……お前のホントの子か？

絹子 ……（ガツクリとうなづく）

小六 ……さうか。……そいで……そいで、その子の——？

絹子 ……（下を向いて身動きもしない）

小六 え？……誰だい？……その子の父親は——？

絹子 ……。

友代 ……（姉が黙つてゐるので、代つて答へる）あの……姉さんは、辰造兄さん——御厨辰造といふ人んと共に、片附いたんです。そいで、辰夫ちゃんと言ふのは、その子供です。

小六 御厨……さうか……さうだつたのか。

絹子 ……あれからズツと——私、待ちました。待つてゐましたけど、あなたから手紙も来ない……そこい、お父つあん亡くなりました。家は見なくちやなりません……いろいろ、やつて見ましたけど、女手ぢや、どうにもなりません。そりや、すいぶん、なに……して……とうとう、そいで、是非にと言はれて、なにする事になりました。……かんばんして下さい。

小六 ……そんな、そりや、かんばんするもしないも……そんなお前——。……さうか。

絹子 それについちゃ、その時、あなたに何とかして話だけでもと思つて、以前のお仲間の人達を、はじからたづねて歩いたんですけど……どうしたんですか、一人も逢へなくつて——

小六 そりやあの頃、大方みんな、東京を賣つて、よそへ行つちやつたから。……さうか。

……(話してゐる間に急に眼を光らせる)いゝや、そりや、いゝ。しかし、此處で先刻から聞いてると、その子供、だいぶ、むづかしそうぢやねえか。こんな際に、その父親——御厨か——その人あ、やつて來もしないで、何をしてゐるんだ？

絹子 えゝ、そりや……。

小六 お前にだけ、こうして苦勞させて、……そんなこつて有るもんぢや無え。全體、そんなお前——

友代 あの、辰造兄さんは、南方からまだ復員して來ないもんですから……。

小六 え、復員？……するてえと、その人、兵隊だつたのか？

友代 えゝ。

小六 ………。

婦長 (そこへ、正面廊下の奥から婦長が出て來る。小走りに上手廊下の方へ横切らうとして立停る)

婦長 あゝ此處に居たんですか。(と絹子と友代に言ひ、次ぎに小六と文三にチラリと眼をやつて)……こちらのお見舞ひだつたんですね？

文三 ……へえ、どうも先程は。

婦長 (絹子に)直ぐ、手術室の方へ來て下さい。

絹子 (ハツとして立あがる)では、あの、辰夫が——？

婦長 ……(自分は藥局の方へ)

友代 (姉を助けて歩き出しながら)しつかりしてよ、姉さん！ (婦長の背に)そいぢや、もう、いけないんでせうか？

婦長 急いで下さい。(藥局の中へ消える)

(友代は絹子を助けて、急いで正面廊下の奥へ去る。あとには、椅子にかけて自分の考への中に落ち込んでゐる小六と、キョトリと突立つてゐる文三)

文三 ……だいぶ、この、むづかしそうだなあ。

小六 ……(忘れた頃になつてから)……え？ なんだ？

文三 子供さ、その。……どうも、様子が……なんぢやないか。

小六 ……(ピクツとして椅子を立つ)……さうか。……(そこへ婦長が大きな帳簿を持って藥局から出て來る。それに向つていきなり)その、病人は……駄目ですか？

婦長 ……(チロリと見るが、直ぐに帳簿を開いて調べにかゝる)

文三 ……なんとか、その、ならねえもんですかね？

婦長 ……（相手にせず、捜してゐる頁が見つかったらしく、廊下奥へ）

（そこへ院長がスタスタ出て来る）

婦長 ……（院長に）そいぢや、あの——？

院長 うん、いや……で、近所から来て貰ふ人の見當は附いたかね？

婦長 はあ……でも、こんな遅そごさんすし、とにかく、いやがりますから……やつぱり折口さんにしませうか？

院長 さうさ、だけど看護婦の手が一時だけでも一人缺けるのは困るんだが……まあ、しかし、ほかに居なければ仕方が無いが……とにかく、ぢや、やつて見るか。ぢやね、枸縁酸はよして、タオルであつためて行こう。準備してくれ。

婦長 はい。

院長 そいから、あのお母さんは、此方へ連れて來といてくれ。あすこに置いとくと又倒れる。第一、あゝ弱られちや、見てる此方が、たまらん。クランケ見てるぶんにや、どんなひどい奴でも平氣だが、はたで騒がれるのは、やりきれん。ハハ。

婦長 ……さうします。

文三 （院長に）どうか、ひとつ、よろしく、その……。

院長 やあ……（婦長を見る）

婦長 今、なにしてゐるの、見舞ひに——。

院長 さう。……（軽く頭を下げてから、急ぎ足に廊下奥へ。婦長もそれを追つて小走りに去る）

（取残された小六と文三は、暫くボンヤリしてゐる。……間。……やがて小六はノロノロと板の間を歩いて、あがり端へ行き、そこに立停つて、奥の氣配に耳を澄すやうにしてチョット立つてゐるが、溜息を一つ附いて、しゃがんで靴を取る）

文三 ……どうすんだよ、兄き？

小六 う？ ……ける。

文三 けるつて、お前……このまゝで、お絹さんが……そいから、その、子供が、いよいよいけねえとなりや、お前——

小六 ……俺達あ、居ねえ方がいゝ。

文三 だけんどお前……そんな……第一、兄きや、そいで、どうすんだい？

小六 そうさなあ……山半の親方んとこへでも行くか。なに、こうなりや、思ひ残りあ無え。

文三 するてえと、磐城は、やめにするのか？

小六 うむ……なんしろ、張合ひが抜けちやつた。まあ、いつとき山半で草鞋をぬがして貰つて、萬事はそれからかな。

文三 するてえと、細田つてえ人の方は——？

小六 なに、先きに行つて貰ふさ。……考へて見りや、どうで、俺なんざ、ゴロンボウに生れついでるかも知れねえんだ。

文三 だつて、そいぢや、あんまり、アツケ無えぢやねえか。もう少し、この——

小六 なあに、こいで、もともとだ。なるほど、六年が間、あいつが待つてゐやうなどと思つたのが、虫が良過ぎたんだ。小僧、やつぱり、焼きが廻つてゐやがら。

文三 だつてお前、それとこれとは、別だ。俺の言ふなあ、お前——

(言つてゐる所へ、正面廊下奥から、後ろに氣を残しながら、オロオロと昂奮した絹子が金貝看護婦に助けられて連れられて来る)

絹子 いえ、かまひませんから——大丈夫です！ かまひませんから——

金貝 此方で——いつとき休んでゐて下さい。——また、あなたが、なんですと困りますから——

絹子 あたしは、たとへ、どうなつても、かまひませんから——あたしの血を探つて下さい。私の——

金貝 (無理に絹子を長椅子に坐らせる) 大丈夫ですから、安心して——妹さんが附いてゐちつしやるんですから——

絹子 駄目でせうか？ 私のでは、駄目でせうか？

金貝 身體が弱つてゐらつしやるんですから——。いえ、さうなれば、チャンと先生がなさつて下さるんですから、安心して、委せて——

文三 ……(あがり端のところから振返つて二人を見てゐたが) どんな具合ですかね？

金貝 は？ ……はあ。

小六 ……(これも振返つて、オロオロと廊下奥にばかり氣を取られてゐる絹子の様子を見てゐる) ……いけないかね？

金貝 いえ……いけないって事はありませんけど……なにしろ……一聲でも、泣いてくれるやうだと、取りとめると、先生、おつしやつておますけど——

絹子 (祈るやうに)……泣いてくれ！ 辰夫、大きな聲で泣いておくれ！ 辰坊、泣いておくれ！ (……そこへ廊下奥から婦長が小さいガラス板とメスを持って出て来る)

婦長 (その邊を見廻し、あがり端に行つてゐる小六と文三の方へ敏捷に寄つて行き)あなた方、チヨツト待つて！ チヨツト、チヨツト！ あがつて下さいな！

文三 なんか、その——？
婦長 すみませんけど (文三の片耳を、いきなり掴んでグイグイと消毒する)ジツとして！ (メスを持つて行く)

文三 おつと！ (めんくらつて、眼をバチクリさせてゐる)
婦長 はい、よろしい。(探血を済ませ、疵跡にバンソウコウをはり)そちら——(今度は小六の

耳にかゝる。手馴れたもので、早い)
小六 ……どうするんですか？

絹子 辰夫、泣いておくれ！

文三 ……どうするんかね、俺達を？

婦長 はい済みました。チヨツトの間、待つてゐて下さいね、直ぐですから。

絹子 いかゞでせうか？ もう——？

婦長 あなたは、そこで横にでもなつてゐて下さい。(小走りに廊下奥へ)

文三 なんせ、たまげ返つたバアちゃんだなあ……どうも……(金貝に)ありや、偉えのかねえ、此處で？

金貝 (微笑)はあ、婦長さんです。

絹子 そいで、どうなんでせうか？ (これはあくまで子供の事が気がムリで、金貝にすがり付くやうに聞く)

金貝 先生と婦長さんがゐらつしやるんですから、そんなに心配なさらなくつても——

小六 ……(妙な風になつてしまつて、直ぐには歸りもならず、絹子の方ばかり見てゐたが)……そいで、何かね、……その御厨と言ふ人の留守は、暮しの方はどんな風に——？ 親戚は無いのかね？

絹子 ……東京には親類は無いんです。……辰造は工場の方へつとめておきました。そいで、

そのあと、頼んで、同じ工場へ私もつとめさして貰つてゐます、精密機械の……。妹も働きに出てゐますから……。

小六　すると、子供は——？

絹子　辰夫は託兒所にあづけて行くんです。……それで、そんなわけで、今度も、つい手運れになつてしまつて……。夕方から、痛い、痛い……。いえ、しばらく前から、おなかの具合が悪くつて、直ぐに痛いと言つてました……。それで、いつもの事で大して氣にもしないで、そのままにして置いたんです。腸捻轉なんて、思つても見ないもんですから……。そのうち、あんまり苦しがるので、こちらへ、なに……。子供の事で何を聞いてもよくわかりませんが、晝間、すべり臺から轉げ落ちて、棒かなんかでひどくおなかを打つたらしいんです。前から故障が有つたとこへなにしたんで、それで——だそうなんです。……。いえ、私の不注意です。こんな事になつてしまつて……。みんな、あたしが至らないからです。……。こいで、あれに死なれでもすれば……。御厨には申しわけが無いし、あたし、生きちや居れません。(泣く)……。辰夫、どうぞ、お願いだから、お願いだから、泣いておくれ！

文三　大丈夫だよ、大丈夫、そんな事にやらんよ、なあに、そんなお前——

小六　……(絹子の様子の痛々しさに、なぐさめの言葉も出ないで見てゐたが、フト思ひ付いて洋服の内ポケットから紙幣入れを取り出し、文三に渡す)

文三　……どうすんだよ？

小六　……(眼顔で絹子を差す)

文三　そつくり——？(小六うなづく。文三、絹子の方へ行き、その膝へ紙幣入れを置く)

絹子　……(それを見てから、小六の方へ眼をやる)

小六　……少しだけど、何かのたしに、使つてくれ。

絹子　いえ、そんな……。私、こんなもの——

小六　ホンの土産代りだ。……。なあに、たんとは無え。……。 (微笑) なに、こんな事と知つてりやもう少しは持つて來れたんだが、なんしろ、まるでお前……。ハハハ(寂しい笑ひ聲)

絹子　……すみません。(金の事では無い)

小六　いゝんだ、いゝんだ、ハハ、なに、もともと——

(そこへ再び婦長が急いで出てくる。腕まくりをしてある腕を更にまくり上げながら)

婦長 さ！ えゝと……(と文三と小六を見て) 血を少しばかり、いたゞきますよ。

文三 血？ 血と言ふと、その……？

婦長 なに、ホンの少しです。

文三 血をかね？ (恐慌をきたしてゐる) おいらあ、どうも、この……

婦長 いや、あなたはベケ。合ひません。(小六に) こちらの……

文三 ベケえ？ (眼をキョトキョトさせながら、ホツとする)

婦長 (かまわず小六に) あがつて下さい。

小六 おいらの？

婦長 あなたの、合ひますから。いゝでせう、ホンのチョットですから？

小六 そりやまあ、構はねえけど……

婦長 (小六の手を取つて引き上げるやうにして) ひとつ、頼みます。さ！

絹子 それでは、あの……？

婦長 いゝでしょ？ 輸血協會では間に合はないし、此處の看護婦に一人、合ふ、が居ます

けど、看護婦ですしね、チョット困りますから。それから町會から型の合ふ人に来て貰つてもいゝんですけど、なにしろ遅そごさんすしね、丁度この方なら御愁意のやうだし、あなたからも、頼んで下さい。

絹子 はい、そりや……でも——(しかし、今の場合、具合が悪くて、口に出して頼みもならず、困つて、たい祈るやうな眼つきで小六を見てオロオロしてゐる)

小六 どうも、困つたなあ。

婦長 それで、こちらの息子さんの命が助かるかも知れないんですから——

小六 助かるかね？

婦長 そりや、やつて見なければ、なんともわかりませんが……とにかく、今のまゝにして置けば、もう望みはありません。

金貝 お願いします！

小六 ……弱つたなあ、どうも。

婦長 あなたの心持一つで、——ことに、まだ復員なすつて来ないと言ふぢやありませんか、あの子のお父さん——そう言つた方の息子さんの命が助かるかも知れないんです

から——

小六 ……そりや、なあに……アカの他人にしたつて、人一人助かるとありや、俺の血なんぞ、いくらでも、やつていゝんですがね——

婦長 よろしい！ では、急いで！ なに、このまゝでいゝんです。上着だけ此處で脱いで行つて貰ひませうが。(言ひながら、既に小六の背廣を脱がせにかゝつてゐる)

小六 (あわを喚つて) チヨ、チヨツト。チヨツト待つて！ さうぢや無えんだ、さうぢや無えんだ、俺の言ふなあ、その……(言つてゐる中に婦長から上着を脱がされてしまつてゐる。益々あわてゝ) とつ！ いや、俺の言ふなあ、その、俺の身體あ、どうも、役は立つめえと思つて——

婦長 さあさ、急いで！ 此方へ来て下さい。

小六 弱つたなあ！ さうぢや無えんだ。俺の身體ぢや、そんなわけには行くめえと思ふんですよ。

婦長 どつか、悪いんですか？

小六 なに、悪いつてわけぢや無えんだけど、全體、俺の身體や血なんてえものは……どう

も困るんだ。……だらうと思ふんですよ。

婦長 どれどれ、ぢや、チヨツト見せなさい。(今度はシャツをむしり取りはじめ) ズボンも脱いで！

小六 あ！ ……(既に上半身を半裸體にされかけて、あわて切つて) さうぢや無えんだ、さうぢや無えんですよ！ 困るよ！ 困りますよ！ おいノロ文！ (うろたへて、文三に助けを乞ふ)

文三 どうもこの！ えゝと……んだけんど……(これもウロウロするが手出しもならず)

婦長 いゝ身體してるぢやないの！

小六 違ふんだ！ その、俺の身體なんて、これまで、その、持ちくづして……この、ロクな事あして来て無えんだから、さんさん、この……つまり、よこれ切つてるんだから——

婦長 ……(相手の言ふことが、わかつたやうなわからないやうな、しかしすがに年で、少しは察しが附いたらしく、ニコニコして) かまんかまん！ そんな事あんた、なあに、誰にしたつて——いざとなりや、どうにでもなりますよ。

小六 (へこたれ切つて殆んど泣きつら) いや、それが、普通の誰も彼ものなには少しワケが違ふんだから、どうも……困るよう!

婦長 かまひません! さ! (強引に小六の手を掴んで、廊下奥へ引立て、行く) まかせて置きなさい! 此方はくろうとです!

小六 知らねえよ! 俺あ、知らねえよ。(消える)

(あとには文三が、小六の言ふ事に就ては彼自身にも多少はおぼえの有る事ゆえ、よくわかるし、さればと言つて押しとどめる事もならず、閉口して、額に片手を持つて行つたまゝ、アツケに取られて見送つてゐる。絹子はそつちへ頭を垂れて、兩手を握りしめてゐる。金貝は小六のあわてやうが、あまりひどいので、びつくりして見送つてゐる)

絹子 ……(低い聲) おたのみします、小六さん!

文三 ……どうも、へえ、……フウ! ……全體、この……(ボンヤリと金貝に) なんですか

ねえ……この輸血なんて事が、そんなに手軽に出来るもんですかねえ?

金貝 はあ、簡単です。準備はスツカリ出来てゐますし、一番簡単なやり方だと、十分もかゝりません。内の先生は、それに、軍醫で出征なすつてゐたので、さんざ馴れてゐら

つしやいますから。

文三 さうかなあ……軍醫さんか……えゝと(と奥を氣にしながら、絹子に) お絹さん……その、御亭主と言ふなあ、いつ頃出征なすつたんです?

絹子 ……(心配で椅子から立つて見たり、又掛けて見たりして奥の氣配に氣をとられてゐる) え?

文三 いや、その御厨と言ふ人は、いつ頃出征——?

絹子 ……さきおととしです。……子煩悩な人で……辰夫が死にでもすると……どんな氣持がするか……それを思ふと、私、たまらないんです。……出来ることなら、私が身替りになつてゝも、辰夫だけは……辰夫だけは私……。

文三 さうだらうなあ……(金貝に) 輸血と言ふもなあ、そんなに利き目が有るもんですかねえ?

金貝 そりや、やつて見なくては判りませんけど……病氣の種類にも依りますが……出血のひどい患者さんなど、大概テキメンに利きます。人に依つては、今迄脈も息も絶えてゐたのが、血を入れると、いきなり眼をバチバチさせて、起きあがらうとする人なんぞありますわ。なにしろ、生きてゐる血がデカに入つて行くんですから。

文三 そんなもんかねえ……。

絹子 すると辰夫などのやうな病人には——？

金貝 利くわけですわ、わけから言へば。……とにかく、泣き出す位の力が出て呉れさえすれば、こつちのもんだつて先生おつしやつておました。

絹子 ……泣いてくれ辰夫！ 大きな聲で泣いておくれ！ (ヨロヨロ立って廊下口の方へ行きかける)

金貝 落着いておて下さい。(それを無理に椅子へかけさせる) そんなにして、又、あなたが倒れたりなされると、困りますから。

文三 さうだ、そりや、落着いておなくちやいけねえ……。(自分も落着けな、でウロウロと廊下口へ行って奥を覗いたり、椅子の方へ来たり) 大事にしてくれねえと……だけんど、いやにヒツソリしてやがるなあ。……いや、なんだよ、實際この、びつくりしましたよ、最初にあんたを見た時あ……なんしろ、あんまり變つてゐるんでなあ。……そりや、こんな心痛が有つて見りや、無理も無え。無理も無えけど、なんせ、昔の面影なんぞ、どこを捜したつて無えもんなあ。ドツキリしちやつたあ。……はじめ、先刻

の妹さんを、あんたどとスツカリ思ひ違へてね、ハハハ、また、似たと言つても、六七年前のおんたに瓜二つだもん。ハハハハ(つとめて笑ふ)……そんでも、兄きは、やつぱり、たいしたもんぢやありませんか、當のおんたを見たら、こんだけ變つてゐるのに、一目でそれとわかつたからね。惚れてると言ふなあ、たいしたもんだなあ。ハハ……(やつぱり、他の二人は、笑ひに乗つて行こうとせぬ)

婦長の聲 (廊下奥から) 金貝さん！ 金貝さん！ チョット来て！

金貝 はい！ (立つて行きかける)

絹子 ……(これもギクリとして立ち、金貝の後に添つて行きかける) あの一——？

金貝 あなたは此處に居て下さい。

絹子 でも、私も——

金貝 (絹子の肩を押して椅子に掛けさせ) 大丈夫ですから、此處に落着いて居て下さい！ (文三へ) ああ、こちら、お頼みしますから。

文三 え？ あ、なに、よござんす。えいと——(言つてゐる間に金貝は小走りに廊下奥へ) どうも、この……(まだ立ったり掛けたたりしてゐる絹子) 大丈夫だよお絹さん……まあ、

そんなに、なんだ……なに、向ふはチャント大勢附いてゐるんだから……（言ひながら
絹子を掛けさせるが、しかし、さう言つてゐる自分も、奥の氣配にばかり氣を取られてゐる。奥
はシーンと静まり返つてゐて、コトリとの音もしない）……いやあ、ハハハハ（と無理をして
笑つて）おどろいたの、なんのつて！ なんしろ、ねえ、四五日前、いきなり稲葉の兄
きにふんづかまつて、お絹はどこだ？ まるで、この俺があんたの親元ぢやあるめえ
し、あんたの居どころを知らねえと言ふ法は無えと言はんばかりさ……マゴマゴする
てえと、ぶんなぐりそうなけんまくでよ、その場から一緒に行けつてんで……まるで、
うしろからケツを叩かれんばかりにして、毎日々々、足あスリコギにして、あんたの
行方さがしさあ。ハハ、それで、探ね探ねてヤツトあんたの家が見つたら留守……
……此處だと言ふんで来て見ると、これだ。……なにさ、はなつから看護婦になつてゐ
るんだと思つてゐるもんだからね、先刻の山あらしみてえな看護婦の大將にやおどか
される……や、もうサンザンさ。……そんてまあ、とにかく、飛込んで見たら、その
常のあんたのさ、子供さんの手術の眞最中だと来た……まるでどうも、芝居か小説本
……なら、まだいゝけど、手も無くモグラモチが彼方へ行つちや石ころにアイタシコ

此方を掘つちや木の根へアイタシコ、しまひにヤツトの事で、うまい具合の穴を掘り
當てたと思つたら、そいつが待ちがまへてゐた犬の口の中だつたつてね……先づ、ま
あ……これがめんくらわずに居られますかつてんだ……なんしろ、お前さん、おどろ
き桃の木さんしよの木、……さんしよの木の下で、雨ふり蛙けえるが眼をむいてらあ……
そんてまあ……（相手の氣をまぎらすために喋るが、心が此處に無いために、次第にとりとめ
が無くなつて来る。それに絹子はやはりヒョイと立たうとしたり、椅子の背を掴んで見たりして
奥にばかり氣を奪はれて彼の言ふことなどよくも聞いてゐないので、段々に言葉が續かなくなつ
て来る）この……（ヒョコヒョコと廊下口の角で、奥を覗く。絹子は無理に落着こう
とつとめながら、その文三の横顔をチツと注視する——あたりはシーンと静かである）
（出しぬけに、大時計がジージーと唸つてから、ゴーンと一時を打つ。その音が深夜の静か
な醫院内に、大きく反響する。……虚を突かれて、文三も絹子もギクンと飛びあがる）
文三 ……（騙け出しそにしたへツピリ腰で振返つて）な、な、な……へつ！
絹子 ……（これも直ぐに時計とわかるが、心配は益々つのるばかりなので、立つたままでワクワク
してゐる）

文三 (絹子を見て) ハッハハ、おどかすねえ! チッ! ねえ、ハハ。

絹子 ノロ文さん、どうか、どんな様子か、手術室の方を見て来て下さい。

文三 ノロ——?

絹子 いえ、あの……お願ひですから。

文三 フウ! そりやね……なんだ……ノロ文か。(變なところで感心してゐる)

絹子 (相手の氣持などに氣を使ふ餘裕なし) 見て来て下さい、どうか!

文三 うむ……。

(そこへシャツの腕まくりをおろしながら小六がフライツと戻つて来る)

文三 お、どうした、兄き? ……すんだのかね、もう?

小六 ……。 (氣抜けがしたやうに絹子の方を見る。絹子は、すがり附くやうな眼で小六を見たり、處

下奥を見たりしてゐる)

文三 そんなで、どんなふうかね? その——

小六 うむ……。(少しヨタヨタするやうな氣味でユツクリ歩いて椅子に置いた上着の方へ)

絹子 小六さん、あの——

(そこへ奥から、昂奮した婦長がツカツカ出て来る)

婦長 御苦勞さんでした! チョットその邊で、横になつて休んで下さい。

小六 ……。

婦長 その長椅子にでも。

絹子 それで、どんな具合なんでせうか?

婦長 もう少し見て見なければ、わかりません——(小六の方へ寄つて行き) いゝんですか?

二十分ばかり、此處で横になつて休んで下さい。さあさ! (小六に上着を着せてやる。

絹子もそれに手傳ふ)

小六 いゝんだ。……なに、なんとも無え。……だけど……おいらあ、知らねえよ。……あ

の子にたゞつても、おいらあ、知らねえよ。

絹子 ……すみませんでした。

婦長 はい、ネクタイ。

小六 いゝんだ。(いたわられるのが少し癢に障るか、怒つたやうに言ふ。絹子は婦長からネクタイを受取つて、小六の襟に結んでやりかけるが、両手がブルブル頭えてゐるために、なかなか結べ

ぬ

婦長 ハハ……これでもし効果が有れば、あなたはあの子供さんの命の親ですよ。

文三 大丈夫かい兄き、少し横になつてゐなくつても——？

小六 なんとも無えと言つてるぢや無えか！

文三 だけんど、少し、この、フラフラしてるんぢや無えか？

婦長 よろしい、取つて置き葡萄酒が少しあるから——

小六 チツ、大丈夫ですよ。

(その時、はじめ静かに、次第に激しく、奥からきこえて来る子供の泣聲。同時に一同ビタリと黙つてしまひ、その方へ耳をすます……間。……婦長は薬局の方へ行こうとした足を停め、絹子は結びかけたネクタイの手を停めたまゝ)

婦長 ……(次第に自分に集つて来た他の三人の視線を見返して、強くうなづいて見せる) うまく行つたやうです。……(薬局へ入つて行く)

絹子 ……(子供の泣聲を聞きすまして奥の方を見てみた眼を、次第に小六の眼へ移す。まだ無意識に小六のネクタイを掴んだまゝである)

文三 ……やれやれ……。

(そこへ、バタバタと奥から驅け出して来る友代)

友代 ……姉さん！ 姉さん！ 辰夫ちゃんが——姉さん！ 辰夫ちゃん眼を開いて、姉さんを捜してゐるわよ！

絹子 ……(ネクタイを掴んだまゝの両手で顔を蔽ふ。自然、小六の胸に前髪が觸れんばかりになり合掌してゐるやうな姿勢になる。……やがて立つてゐるのに堪え切れなくなり、そのまゝズルズルと膝を突いて、小六の足元に手をつく) ……ありがたう！ 小六さん、ありがたうござんした！ おかげで——(たりもふりも構はない心底からの感謝)

小六 ……(ボンヤリして突立つてゐる)

(そこへ、喜色満面の院長がツカツカ出て来る。それと出會ひがしちに、葡萄酒のビンとコップを持つた婦長が薬局から出て来る)

院長 ……本田君、よさそうだ。タバコくれ。

婦長 はい。(手がふさがつてゐるので、コップを手近くに立つてゐる文三に) はい、これを。

文三 へえ？ (そのコップに婦長が葡萄酒を注ぐ。注ぎ終ると婦長はピンを友代に渡して、自分は

タバコを出して院長に渡し、マッチをする)

絹子 (院長に) ありがたうございました。ありがたうございました。

院長 (フーツとタバコを一吸ひして) いやめまだハツカリした事は言へんが、大概大丈夫でせう。早く行つて見てやつて下さい。

絹子 はい。……(イッソして、小走りに廊下奥へ去る)

婦長 あらまあ! どうしたの、あんた?

文三 へ?

婦長 あんたにあげたんぢやないのよ、その葡萄酒! (なるほど、文三は、うつかり飲んでしまつてゐる)

文三 さいですか?

婦長 さいですかぢやないですよ! あたりまへぢやありませんか! こちらの^{かた}方が、採血した後だから、なにしてゐるのに、なんてまあ、ホントに! (コップをむしり取つて小六に手渡す。それに友代が葡萄酒を注ぐ)

院長 ハハハ、まあ、いゝさ。ハハ!

友代 ホントに、ありがたうございました。

院長 なに、禮を言ふなら、この^{かた}方さ。(小六を差す)

友代 (小六に) 何と言つてよいか——

小六 ……(まだボンヤリしてゐたが、手のコップにフツと氣附いて、一気にグーツと呑みほし、頭をブルンブルンと振る)

婦長 ホントに、いつとき横になつてゐるといゝんですけどね?

小六 なに……だけど……(院長に) どうも、なんですよ、おいらあ、知りませんよ。

院長 なんだね?

小六 おいらの身體なんてもなあ、これまで持ちくずし切つて、……とにかく、俺の血なんて、ヤクザと言つても、これほどヤクザな——

院長 やあ、君の血は良い血です。

小六 え?

院長 強い、立派な血だ。

小六 ……強い? ……つ——? (びつくりして院長の顔を穴のあく程見つめてゐる)

院長

大丈夫だよ。ハハハ。(きげん良く笑ひながら、小六の背を平手でトンと一つ叩いて)さてと

(婦長に吸ひ残りのタバコを渡しながらか)ぢや、あと、葡萄糖を一本、用意しといてくれ。

その必要は無からうとも思ふが。(奥へ歩き出しながらか)急ぎはしない。(廊下奥へ消える)

婦長

はい。……(友代に)あなた、もつと注いであげて。

友代

はあ。……(小六に葡萄酒を注ぐ。小六は、それを無意識に立てつゞけに二三杯飲む。眼はうつろに院長の去つた方を見てゐる)

婦長

(小六の様子が少し變なので注意して見ながら)ホントに、あなたが折よく来て下さつて居たので、助かりました。

小六

……………。

文三

兄き——おい!

小六

う? ……(眼がさめたやうにその邊を見廻し、もう一度奥へ眼をやり、それからユツクリと)

……そいちや——(婦長にチョット頭を下げてコップを返してから、あがり端へ行き、腰をおろして、靴をはきはじめる。文三も、その小六の様子を横眼で見い見いしながら、靴をはく)

友代

……(二人が歸る様子に、氣をもんで)あの、もうチョット居て下さると、なんですけど

……姉からも、よくお禮を言つたり……それから、あの、なんか——

婦長

大丈夫ですか?

小六

……(靴をはいてゐた手をフツと停め、タタキを見つめて、ヂツとなつてしまふ。不意にククと妙な聲を出す。文三も婦長も友代も、びつくりして見守る。その視線の中で、クク、ウーツと二つ三つ男泣きに泣き出す。しかし直ぐに泣聲を止め、兩掌で顔を蔽ふて石の様にうづくまつてしまふ。……他の三人も、無言でそれを見守つてゐる。……永い間。……大時計の秒刻の音)

文三

……(驚ろきからヤット回復して)ど、どうしたんだよ、兄き?

小六

……(ツト立つて、出て行きそつにするが、振返つて友代を見て、フツと眼を釘付けにされる)

婦長

氣分でも悪いんぢやありませんか?

小六

……お絹……お絹さんに、よろしく言つて下さい。子供さんも……そいから自分も、どうか大事にしてくれるやうに。

友代

はあ、それは……でも、ホントに、もういつとき居て下さるといゝんですけど——姉さんも、いろいろ、なにか——

小六

いゝんだ——(先程からあまりにマチマチと相手を見るので、友代モチモチする)

文三 ……なんしろ、いまだに、お絹さんだと言はれてもウツカリすると、さう思へるよ、うむ。

友代 まあ……。

小六 そいちや——（先きに立つて出て行きかける）

文三 どうすんだよ、兄き？ どこへ、お前——？

小六 こいから、上野だ。

文三 上野？ ……そいちや、なにかね、やつぱり盤城に行くんだね？

小六 ……（うなづいて）お前も一緒に来たきや、来い。

文三 そりや！ まあ、行くけどさ、……しかし、急にいろいろになるもんだから、なんだか、お前——

小六 今夜と言ふ今夜は、考へた。……今迄、全體俺あ、何を寝呆けてゐたのかと思ふ。……六年も七年も経つた夢を追つかけて、なんてえこつた！ ……第一、キザつたら無え！ 以前ヤクザな真似ばかりしてゐた頃あ、太えツラしてゐたくせに、今になつて見りや、自分で自分に見きりをつけて、物の役にや立たねえもんだと思ひ込んで

る！ ケッ！ ウヌの身體ん中にや、ドブ泥でも流れてゐると考へてゐたんだなあ。……そいつが、なんと……強い血だ。強い血……びつくりだ。ウム。これまで、まるでお前、のら犬のやうに……たよりになるものあ無えかと、捜し廻つてさ、行く先、次から次ぎと叩きこわされてちや、ウロウロする。……言はれて、氣が付いて見るとえと、なあんのこつた！ ウヌが身體ん中に、なんとお前！ チヤント有るんだ！ はじめつから備はつてら！ いたゞいてら！ チッ、どうでえ、ビツクリだあ！ ……これまで見てえに、ウヌが身體を……ウヌが量見を……ウヌで粗末にしちや、ならねえ！ 立てれば、チヤンと人さまの、役に立つ身體だ。……へつ！ 女と一緒に向ふで小じんまりと暮そうなど考へて、シヤラックせえ！ 正に小僧だつたよ。……しかし、こうなつたら、大僧も小僧も無えや。もうグラグラと迷つたりはしねえ。石炭が要るといふから掘りに行くんだ。

文三 そりや、さうだ！ そりや、さうだ！

婦長 どうなすつたんです？

小六 ハハハ、なにね、これから炭坑に行くんです。

婦長 さう！ そりや、結構ですわね！ そりや、いゝわ！ ひとつしつかりやつて下さいよ！

小六 あとは、よろしく一つ――

婦長 大丈夫々々々。(友代に) そいぢや、あなた、もう一つ注いで、祝盃に。はい。(と差出したコップを、手近かな文三が受取る。それに友代が葡萄酒を注ぐ) だけど、まだ電車が無いでせうに？

小六 歩いて行きます。

婦長 歩いて？ 大丈夫ですか？

小六 ハハ、なに、わけあ無え。

婦長 あらま！ またつ！ (叫ぶ。再び葡萄酒は文三が飲んでしまつてゐる) なんてまあ、この――！ (えんぴを伸ばして文三のえりくびを掴みにかゝる)

文三 ひつ！ (掴まれては大變と、コップを友代に渡すや、あわてゝ懸命に飛びさがつて、三四回、タタキの所でキリキリ舞ひをしたあげくに、廻轉扉を突き開けて表へ消える)

小六 アッハハハ！ (友代から渡されるコップを持つ。友代、涙を流した顔のまま葡萄酒をつぐ)

友代ちゃん、だつけ……姉さんに、そ言つて下さい。小六はよろこんで出かけたつて。

友代 ……はい。

小六 ……(グツと一息に飲みほして) ……ありがたう……(コップを友代に返す)

文三 ……(廻轉扉を細目に開けてニユツと首だけ出す) ……どうしたんだあ、兄き？

婦長 まあた、呑みに来た！ (腕を振廻す)

文三 フツ！ (びつくりして、二三度頤を扉につかへさせてゴリゴリ言はせて消える)

小六 ハハハ、ぢや、さよならよ！ (扉を押して表へ)

婦長 フフ、アッハハハ、ハハハ！ (腹をゆすつて笑ふ)

友代 まあ！ ……(コップと葡萄酒のピンをかゝえ、頬に流れた涙をそのままに、扉のガラス越しに、去り行く二人の姿を、すかして見ながら、これも笑へて来る)

(幕)

あとがき

三好十郎

1

幸福になりたいと思ひます。なにはともあれ、私どもは幸福でなければならぬと思ひます。しかも、今すぐに幸福にならなくてはなりません。遠い未来に、これこれのことが、こんなふうになつてから、はじめて手に入るやうな幸福は、私どもには、なんの役にも立ちません。そんなものを待つてゐるわけには、ゆきません。そんなオアヅケには、私どもは、これまでさんざんさまされて来たのです。オアヅケには、もう、こりこりしてゐます。たつた今すぐに手に入らぬものが、今後いくら待つてゐても手に入らぬことを、私どもは今までの経験で

知りぬいてゐるのです。言つて見れば、私どもは、これまで世の中から、皆さんにだまされ、煮え湯をのまされて来た小供です。しかも、いくらだまされても、いくら煮え湯をのまされても、尙もあきらめないで、それをほしがつて、地だんだを踏んでゐる小供です。私どもは、まがひもので無い幸福を、たつた今、手に入れなくてはならないのです。さうでなければ、地だんだを踏んだり、叫んだりすることを、やめるわけにはゆかないのです。

2

しかし、それが、はたして出来ることでせうか？　いくら私どもがほしがつても、幸福が手に入るでせうか？　今、世界中のどこの社會も、必要品の不足と激しい矛盾のために苦しみのたうつてゐる最中です。苦しみのたうつてゐる社會の中でも、最もいちぢるしい所の一つである此の日本です。全體、こんなさなかで、幸福をほしがるのは、ムチャな、無いものねだりではないでせうか？

私はさうは思ひません。幸福は手に入れうと思つてゐます。しかも、たつた今、手に入れ

うると思つてゐます。理屈ではありません。現に手に入れてゐる人が居るのです。しかも随分たくさん居ります。

3

他人のために、社會のために、自分一個の利益や安樂を忘れてしまつて働いてゐる人。

どのやうな外的な事情や力をもつても打ちこわすことの出来ない、奪ひ取ることの出来ない信念をもつて生きてゐる人。

全力をあげてその仕事をする事と自體が、即ちその報酬であると言つたやうな仕事をしてゐる人。

また、そのやうな仕事を發見して、それだけをしたいと思つてするだけで、それ以外の仕事をみんなやめてしまつた人。

また、それが、そのまゝで人間の進歩に役に立つ仕事を持つた人。

他人のため、社會のためにする事が、そつくりそのまゝ即ち自分のためになるやうな仕事を

持ち、又、そのやうなやりかたで仕事をしてゐる人。――

そんな人たちです。

「仕事々々」と私は言ひましたが、「くらし」と言つてもよいのです。「たのしみ」と言つてもよい。そんなくらしや、たのしみを持つた人です。そんな人たちは、みんな、まちがひ無く幸福なのです。よしんば食べる物が差しあたり多少不足してゐても、他からの力のために苦しまされてゐても、幸福です。ホントの安心と満足がそこに有るからです。幸福とは、安心と満足のことですから。そのやうな人は、有名な人の中にも居るし、無名人の中にも居ります。ホントにうらやましい人達です。そして、そのやうな人達を、よく観察して見ると、必ずしも特別にすぐれた生れつきや能力をその人達が持つてゐるとは思はれません。むしろ反對に、善良で素朴な氣質と正直で單純な合理性と言つたやうなものを多分に持つた人達です。つまり、どこから見ても本來平凡な人が多いのです。その點、私どもでも自分の考へやうと努力次第で、その近くまでは歩いて行けさうに思はれるのです。つまり、幸福になり得る希望が持てるのです。

――と言つたやうな事を、かなり前から、よく考へます。

そして自分も及ばずながら、そんな人達の眞似をするやうに心がけて來ました。なぜなら私も幸福になりたいので。その結果、少しはそれがやれるやうになりました。ホンの一部分です。他人のため、社會のために自分を忘れたり、その他そんなふうな立派なことは、まだとてやれません。やれるのは、せいぜい、自分のしたいと思ふ事だけをして、自分のしたくないと思つた事は、できる限りしないと云ふ條項位のところです。これは割合に實行しやすいのです。もともと私はたいへんわがまゝな人間なものですから、これは都合が良いのです。そして、これだけでも、非常にきゝめが有ります。おかげで、いつも貧乏で、外部の力のために常にいぢめられて苦しんでゐますが、それでも、それ以前よりは幸福になりました。

いや、實は、もしかすると、私は世の中の最も幸福な人間の一人であるかも知れないと思ふ時があります。このやうに貧弱な境涯の、そしてこのやうに世にも醜い肉體を心を持つた私が

です。

私は人間に生れついて、よかつたと思つてゐます。こんな境涯に生れついて、よかつたと思つてゐます。日本に生れついて、よかつたと思つてゐます。藝術の仕事をするやうになつて、よかつたと思つてゐます。

過去から現在に至るまでの自分の生活と仕事が、どのやうに貧寒で、苦しみに満ちたものであつたとしても、それらを他のものと取りかへたくありません。つまり、それらを私は積極的に肯定します。そして積極的に肯定する限り、自分がこんな人間で、日本人で、藝術家である事から當然に起きて来る今後のあらゆる苦しみを、甘んじて受けやうと思つてゐます。言つて見れば、私は一個の癡すべからざる樂觀主義者です。

5

ちかごろ、作品を書くことについても、私は、自然に自分の内なるものから促したてられて書いて行くだけで、特に無理に氣ばつて書くことを、ほとんど、しません。發表の意慾もそれ

ほど強く動きません。自作上演についても、わりに冷淡な氣持で見送つてゐます。そんな事の全部が、どうでもよい事だと言へば言ひ過ぎですけど、正直のところ、大した事では無いやうに思はれるのです。

ですから、こうして又、二つの作品を一冊にまとめて櫻井書店から出版してもらうに就ても、たゞ、二つだけ作品が書き溜つたから、これを読んでくれる人々に読んでいたゞこうと言つた位の單純な心持だけで、それ以外に特に氣張つた心持は有りません。この「あとがき」を書くのも、たゞ、親しい知友に向つて、すなをな季節のたよりに書くやうなつもりで書いてゐるのです。

すべて、無理なことをすまいと思ふのです。自然の流露にまかせて置くことが、一番美しく、そして一番強いと思ふのです。

たゞ、それにしても、私と言ふ人間は、性格が小供らしすぎるのか、内部のデエモンが強すぎるのか——どうも、その兩方らしい——あとからあとからと、書きたいものが續出して來て、自分ながら時にはやりきれなくなりす。一つの作品を書いてゐる最中にも、すぐに又次の物が書きたくなる。それが一つだけで無く三つも四つも書きたくなります。書きたくなる

と言ふよりも、書かないでゐると息苦しくなつて來ます。書いてほしい鬼が、身體中をあばれまわるのです。その鬼を、私がおさへつけます。遂に手が附けられなくなると、書くのです。「泉がわきこぼれるやうに」書きたいと願ひながら、なかなか、さうはゆきません。水の中に性の悪い蛇かたにかゝ居て、それがのた打ちまわつてあばれるたびに、水があふれ落ち、はね飛んでゐるとも言へませうか。これも、しかたの無い事なので、これでやつて行きます。昨年あたりから、ひどく長い作品で、演劇的な條件などを完全に無視して、もつぱら人間と時代を追求する戯曲を書きたくなつてゐて、苦しくて困つてゐるのですが、それに着手するとなると、その執筆期間の二三年は生活費の出先が無くなつてしまふので、まだ取りかゝれないでゐます。その内に、なんとかやれるでせうから、當分、苦しいのをおさへつけて行きます。

この本に載せた「崖」は、前作「おりき」の續篇をなすもので、これは今後も數篇を書きついでで行きたいと思つてゐます。おりきと言ふ人は、風が吹けば吹くまゝにその葉をせよがせ、

雨が降れば降るまゝに葉も枝も幹もグッシヨリと濡れながら、しかし折れも枯れもしないで靜かに立つてゐる大木のやうな人で、私はこの大木をあつちから撫でたりこつちから撫でたりしてゐるのです。あわよくば、そのやうにして、全體としてのおりき及びその周囲の人々の人間像を丸味を持つた、手でつかめるやうな姿に彫り出して見たいのです。「稻葉小僧」は、主として、戦ひ敗れ疲れ果てた隣人に、こゝろよき、健康で平凡な庶民的な共感を中心にした、さゝやかな贈物を差しあげたいと言ふ願ひから書かれたものです。

どちらも、甚だ至らないものゝやうです。——(校正責任 組坂若松) (五月中旬記)



9/26
MI 91
4

昭和二十一年八月十日印刷
昭和二十一年八月十五日發行

★
三好

著者 三好十郎
發行所 櫻井均
印刷者 山元正宜

發行所 櫻井書店

定價金十二圓(稅共)

東京都小石川區大塚町三三
東京都小石川區柳町二六
東京都小石川區大塚町三三
電話大塚(86)四一七一
振替東京一六九〇九五番
會員番號A一一九〇(二番)

一本製時宮一

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

年 12 月 13 日

56



終

